岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(26)

大海廃寺緊急発掘調査報告書

塔心礎

1978年3月

岡山県教育委員会

文化課

序　　文

岡山県下には多数の古代寺院址が存在するが，ほとんどは水田の下になっています。全国的に進められている圃場整備事業はこれら寺院址の存在する場所にも及び，保護上の問題を生じています。大海廃寺の所在する山手一帯も圃場整備が行われることになったため，国の補助を得て，調査を実施しました。

今回の調査はトレンチによるものでありましたが，大海廃寺の規模，伽藍配置等もほぼ明らかになりました。当寺院址の保護に役立てるとともに，古代の美作地方寺院址研究の資料として活用していただければ幸甚と存じます。

最後に調査にあたっては，文化庁，作東町教育委員会をはじめ学識経験者各位から支援と助力を得ました。また，心よく調査の承諾をいただいた地元地権者，寒中の調査に従事された方々に対し，末筆ながら厚くお礼申し上げます。

昭和５３年３月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

例　　言

1. この報告は，岡山県教育委員会が国庫補助を受け，大海廃寺緊急発掘調査委員会へ調査を委託し，その報告にもとづいた発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は大海廃寺発掘調査団が担当した。現地調査は鎌木義昌，近藤義郎，水内昌康の３氏の指導で正岡睦夫，岡本寛久が担当した。
3. レベルの数値は海抜高である。
4. 木材の鑑定は岡山大学農学部畔柳　鎮教授による。
5. グリッドは，塔心礎の穴の中央を原点として，真北に主軸を設定した。調査はトレンチ調査を主体とし，塔基壇及び金堂基壇は一部を平面的に調査した。期間は昭和５２年１１月１０日から昭和５３年２月２８日まで現地調査を実施し，埋め戻しを行った。３月１日からは岡山市西古松文化課分室に於いて遺物整理作業と報告書作成作業を実施した。
6. 出土した遺物，実測図及び写真類は西古松文化課分室に保管している。
7. 塔，金堂の図面は全体を１８０分の１，部分を６０分の１とし，他のトレンチの平面・断面図は８０分の１とした。
8. この報告書の作成編集は，正岡と岡本が担当した。
9. 本書に掲載した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の５０,０００分の１地形図を複製したものである。

（承認番号）昭和５３中複，８５号

目　　次

表　紙　　塔心礎
序　文
例　言
第１章　発掘調査の経過 …… 1
第２章　発掘調査の概要 …… 10
　第１節　遺　構 …… 10
　　(1)　寺域の想定および発掘区の設定 …… 10
　　(2)　塔　址 …… 11
　　(3)　金堂址 …… 15
　　(4)　講堂址 …… 20
　　(5)　僧房址推定地域 …… 20
　　(6)　南門推定地域 …… 22
　　(7)　中門推定地域 …… 22
　　(8)　その他の建物址 …… 22
　　(9)　その他のトレンチの状況 …… 27
　　(10)　窯　址 …… 28
　第２節　遺　物 …… 32
　　(1)　瓦 …… 32
　　(2)　水　煙 …… 37
　　(3)　鉄釘他 …… 37
　　(4)　須恵器 …… 37
　　(5)　弥生式土器・土師器 …… 41
　　(6)　石　器 …… 45
　　(7)　その他の遺物 …… 46
　まとめ …… 47

図　目　次

第１図　大海廃寺位置図 …… 2
第２図　トレンチ配置図 …… 10
第３図　塔基壇実測図 (1) …… 12
第４図　塔基壇実測図 (2) …… 13

第 5 図　塔北トレンチ実測図 …… 14
第 6 図　塔西トレンチ実測図 …… 14
第 7 図　塔東2・3トレンチ実測図 …… 15
第 8 図　金堂基壇実測図 (1) …… 16
第 9 図　金堂基壇実測図 (2) …… 17
第10図　金堂北トレンチ実測図 …… 18
第11図　金堂西トレンチ実測図 …… 19
第12図　柱穴実測図 …… 20
第13図　講堂東トレンチ実測図 …… 21
第14図　講堂北トレンチ実測図 …… 21
第15図　南7トレンチ実測図 …… 23
第16図　南4トレンチ実測図 …… 24
第17図　南4トレンチ・土坑実測図 …… 25
第18図　南4トレンチ土坑出土土師器実測図 …… 26
第19図　南5トレンチ実測図 (1) …… 27
第20図　南5トレンチ実測図 (2) …… 28
第21図　南1トレンチ実測図 …… 29
第22図　南2トレンチ実測図 …… 30
第23図　瓦窯址実測図 …… 31
第24図　軒丸瓦実測図 (1) …… 33
第25図　軒丸瓦実測図 (2) …… 34
第26図　軒平瓦実測図 (1) …… 35
第27図　軒平瓦実測図 (2) …… 36
第28図　平瓦・丸瓦実測図 …… 38
第29図　鴟尾実測図 …… 39
第30図　鉄器実測図 …… 40
第31図　須恵器実測図 (1) …… 42
第32図　須恵器実測図 (2) …… 43
第33図　弥生式土器・土師器実測図 …… 44
第34図　土師器・瓦器実測図 …… 45
第35図　石器・土錘実測図 …… 46
第36図　美作地方奈良時代寺院址分布図 …… 48

図　版　目　次

1－1	大海廃寺遠景（南から）	49
1－2	大海廃寺遠景（西から）	49
2－1	塔基壇（南から）	50
2－2	塔基壇（西から）	50
3－1	金堂基壇（北東から）	51
3－2	金堂基壇（北西から）	51
4－1	金堂北トレンチ・瓦溜り（東から）	52
4－2	金堂北トレンチ・雨落溝（東から）	52
5－1	南7トレンチ（東から）	53
5－2	南5トレンチ（西から）	53
6－1	講堂推定地域柱痕（東から）	54
6－2	金堂北トレンチ・建物址（東から）	54
7－1	瓦窯址（西から）	55
7－2	南4トレンチ・土坑（西から）	55
8	軒丸瓦・軒平瓦	56
9	鴟尾・平瓦	57
10－1	水煙・鉄釘・鉄鏃	58
10－2	円面硯	58
10－3	石器	58

第1章　発掘調査の経過

大海廃寺の位置（第1図）

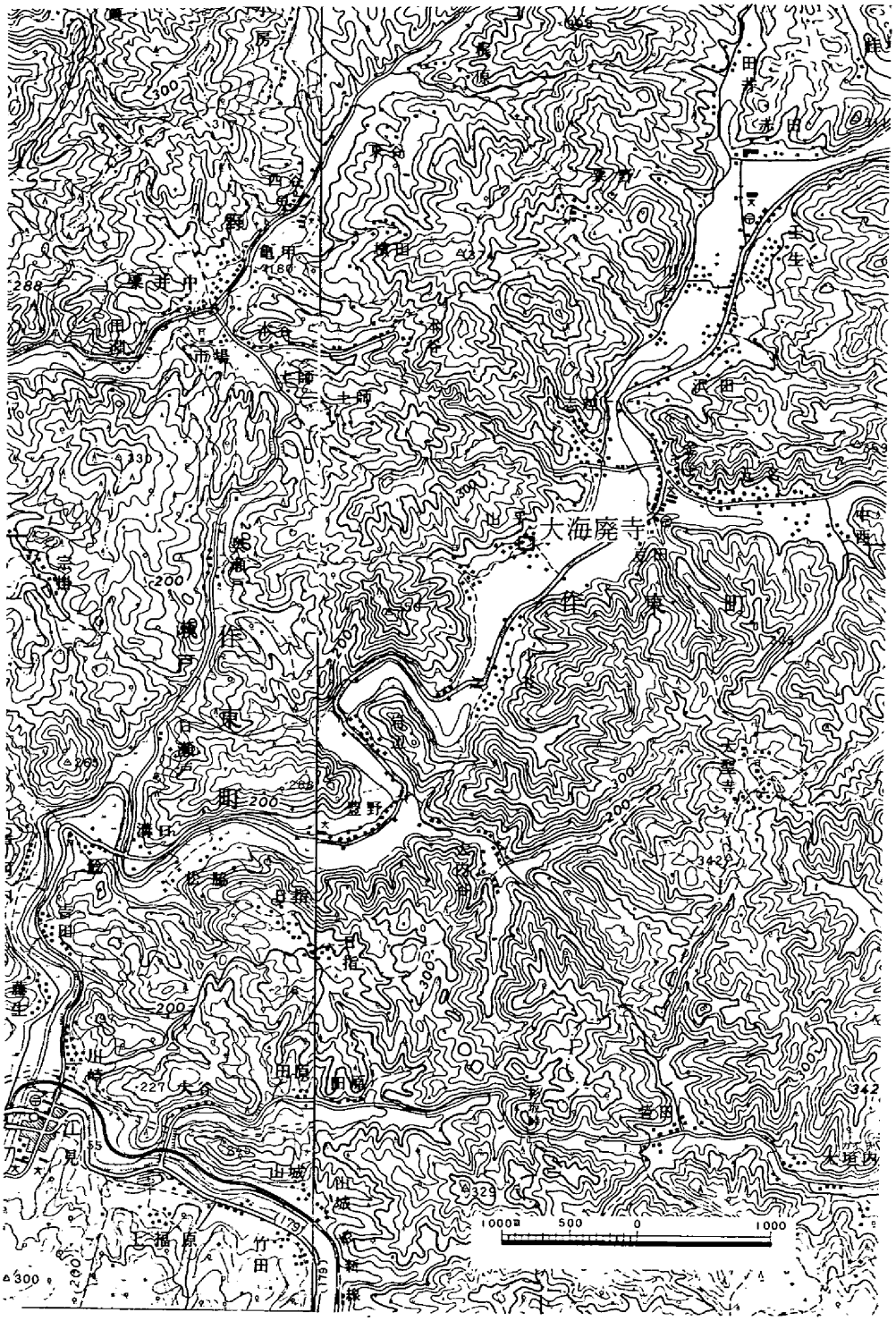
大海廃寺は英田郡作東町山手に所在し，吉井川の一支流吉野川の右岸，山裾に位置している。かつて，吉野廃寺と呼ばれたこともあるが，町指定の塔址及び出土遺物には大海廃寺となっている。江見の町から約8Km蛇行する吉野川を遡ったところが山手である。吉野川は東山裾にあって，北西部は比較的広い水田がひろがっている。地形は北西部の山裾が緩やかに傾斜している。詳細に観察するといくつかの小さな谷地形があり，その間にやや平坦な高まりがみられる。寺の主要な建物はこの高まりの上に立地している。

遺跡では江見の周辺に高本遺跡などがあるが，上流ではあまり知られていない。寺域の発掘調査によって弥生中期以降の遺物が出土している。寺址の北側山裾には封土が流失した横穴式石室の古墳1基が存在する。他には南へ下って豊野に町指定の火の釜古墳があり，南側の平坦部に若干の土師器・須恵器片が散布している。大海廃寺の西方２００ｍの山際には多数の平坦面があり，現在，宅地，畑地，水田等になっている。ここに茶堂ヤ等の名があり「大海寺」といっている。中世頃の寺址と推定される。今回調査を実施した大海廃寺の寺域と推定されるところには金堂ヤ，堂ノ下，赤倉ヤ，蓮町等の名称がある。

塔心礎のあるところには現在薬師堂がある。塔の西方の竹やぶには荒神社が祀られていて，調査後，金堂であることが判明した。西側には防火用水の池があって，基壇の一部を掘り取っている。他は水田や宅地になっていて，南へ向かって段々になって下がる。塔と金堂とは南へのびる高まりの上に位置し，東側に小さな谷地形があり，西側には比較的大きな谷がひろがっている。

発掘調査に至る経過

県下全域で実施されている圃場整備事業が山手においても実施されることになり，これに先だって，寺域及び主要伽藍の配置等を調査して，大海廃寺の遺構を現状保存することが急務となった。そこで，作東町教育委員会と協議して，岡山県教育委員会が主体となり，国庫補助を受けて発掘調査を実施することとした。調査は県教育委員会，作東町教育委員会，県文化財保護審議委員，地権者代表，地区代表等で組織する大海廃寺緊急発掘調査委員会をつくり，これに委託して実施することになった。現地調査は稲刈りの終了した昭和５２年１１月１０日から昭和５３年２月２８日まで実施し，３月１日から３月３１日まで，岡山市西古松文化課分室において，遺物整理と報告書の作成を行った。



第 1 図　　大海廃寺位置図

大海廃寺緊急発掘調査委員会会則

（設　置）

第１条　大海廃寺緊急発掘調査を実施するため，大海廃寺緊急調査委員会（以下「委員会」という）を設置する。

（目　的）

第２条　委員会は岡山県英田郡作東町山手に所在する大海廃寺の緊急調査を実施することを目的とする。

（事　業）

第３条　委員会は前条の目的を達成するため，次の事業を行う。

(1)　大海廃寺の調査研究および保存方法に関すること。

(2)　その他，目的を達成するために必要な事業

（組　織）

第４条　委員会の委員は次の各号に掲げる者のうちから岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

(1)　学識経験者

(2)　作東町文化財保護委員

(3)　関係行政機関職員

(4)　調査予定区域関係者

（委員長）

第５条　委員会に次のとおり委員長および副委員長を置く。

(1)　委員長　　１名

(2)　副委員長　１名

２　委員長は岡山県教育委員会教育次長をもってあてる。副委員長は委員のうちから委員長が委嘱する。

３　委員長は委員会を代表し，会務を掌理する。

４　副委員長は委員長を補佐し，委員長に事故あるときは，職務を代理する。

（諮問委員）

第６条　委員会に専門的事項を審議するため，諮問委員を若干名置く。

２　諮問委員は岡山県文化財保護審議委員及び学識経験者のうちから岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

（任　期）

第７条　委員の任期は調査が完了するまでとする。ただし，それぞれの機関等の代表たる委員はその役職に存する期間に限るものとする。

（会　議）

第８条　委員会は委員長が召集する。

２　委員会は次の事項について審議する。

(1) 会則の制定および改廃に関すること。

(2) 調査および保存等の基本方針に関すること。

(3) その他，重要な事項

（事務局）

第９条　委員会の事務を処理するため，岡山県教育庁文化課に事務局を置く。

2　事務局長及び事務局員は委員長が委嘱する。

（監　査）

第１０条　委員会に会計監査を実施するために監事を置き，その監事は委員長が委嘱する。

（調査団）

第１１条　委員会に発掘調査とその他の事業を専門的に実施するため，調査団を置き，その調査員は岡山県教育委員会教育長が委嘱する。

2　調査団に団長を置き，団長は岡山県教育庁文化課長をもってあてる。

3　調査団に諮問委員を置く。諮問委員は調査委員会の諮問委員をあてる。

（補　足）

第１２条　この会則に定めるもののほか，委員会の運営に関して必要な事項は委員会が定る。

附　則

この会則は，昭和５２年１１月１日から実施する。

大海廃寺緊急発掘調査委員会

役名	氏名	所属	住所
委員長	佐藤章一	県教育委員会教育次長	岡山市内山下
副委員長	岩本貞一	作東町教育委員会教育長	英田郡作東町
委員	飛田真澄	県教育庁　文化課長	岡山市内山下
	塩見篤	〃　文化課長補佐	〃
	光吉勝彦	〃　文化課係長	〃
	福島勧	作東町教育課長補佐	英田郡作東町
	有元實範	〃　社会教育係長	〃
	江見豊	〃　文化財保護委員	〃
	岡本正志	区長	〃
	上山光	地権者代表	〃
事務局長	飛田真澄	県教育庁　文化課長	岡山市内山下
〃　次長	塩見篤	〃　文化課長補佐	〃
	小川佳彦	〃　文化課主幹	〃
	光吉勝彦	〃　文化課係長	〃
監事	久住彰夫	県教育庁　総務課長補佐	岡山市内山下
	春名宏	作東町教育委員会庶務係長	英田郡作東町

諮問委員

氏名	所属	住所
鎌木義昌	岡山県文化財保護審議委員	岡山市兵団5－6
近藤義郎	〃	岡山市津島中1丁目2－RE202
水内昌康	〃	岡山市三野2－6－4

調査団

役名	氏名	所属	住所
調査団長	飛田真澄	県教育庁文化課長	岡山市内山下
調査員	河本清	県教育庁　文化課文化財保護主査	岡山市内山下
	正岡睦夫	〃　文化財保護主事	〃
	山磨康平	〃　〃	〃
	岡本寛久	〃　主事	〃

調査日誌

昭和52年11月8日　発掘器材運搬

11月9日　大海廃寺緊急発掘調査委員会を開く。

11月10日　発掘調査の開始。塔基壇周辺の清掃。塔心礎の中心を原点とし，真北で全体の割り付けをする。杭打作業。

11月11日　杭打作業続行。金堂基壇周辺の清掃。金堂ヤ敷地の草刈り。

11月14日　杭打作業続行。金堂礎石の検出作業。

11月15日　杭打作業続行。金堂礎石の検出作業続行。南2T（トレンチ）周辺の清掃。

11月16日　雨のため現場作業中止。

11月17日　南2T周辺の表土除去。下層に奈良時代の瓦を含む包含層を確認。

11月18日　金堂礎石の掘り方の検出。南2T周辺の作業続行。

11月19日　金堂基壇の清掃，写真撮影。金堂北Tを設定。南2T周辺で明治頃と推定される礎石列の写真撮影。南2Tの掘り下げ。

11月21日　塔南Tの掘り下げ。南8m周辺に瓦溜り検出。軒丸瓦6点出土。南2Tの作業続行。

11月22日　塔南T，下部まで掘り下げる。金堂北T，表土掘り下げ。南2T，地山面で土坑4個を検出。中央部に溝がある。

11月24日　金堂北T，南端近くに瓦溜りあり。北端に大型の土坑あり。鉄釘，須恵器片出土。南2T，清掃，写真撮影。

11月25日　金堂北T，大型の柱穴3個が並んで検出された。南4Tの掘り下げ。寺の北西部で溝の改修工事中瓦窯1基が発見された。南2Tの断面写真撮影。

11月26日　金堂北T，瓦溜りの清掃。瓦窯址の調査。南4Tの表土除去。

11月28日　金堂北Tの作業続行。南4T，遺構検出作業，大型の土坑があり，鴟尾の破片を検出。南5Tの表土掘り下げ。

11月29日　金堂北T，瓦溜り清掃，全景写真撮影。南4Tの清掃作業。南6Tの掘り下げ新しい時代の溝を検出。南2T，東側の土層断面写真撮影。南5T，表土除去作業。塔南T，清掃，写真撮影。

11月30日　金堂北T，瓦溜りの写真撮影，瓦の取りあげ作業。下部の溝を精査。南4T，南6Tの清掃，全景写真撮影。南5T，遺構検出作業。金堂西T，表土除去。

12月1日　南50m付近の大型土坑の検出作業。金堂北T，北端に拡張区を設ける。金堂西Tは作業続行。

12月2日　雨のため現場作業中止。用水路工事中の公会堂から西へ10m位のところで奈良時代の須恵器，土師器片を含む溝らしいところを確認する。

12月3日　金堂西Tの掘り下げ，東端で乱石積基壇の一部を検出する。金堂北Tの拡張区では精査したが遺構は検出されず。

12月5日　金堂西T，西方へ自然に深くなり，谷地形を呈することから，西半分は地山まで掘り下げないことにする。塔北T，塔東Tの表土除去。南4Tの清掃，写真撮影。

12月6日　塔北T，礎石1個を検出，これは後に移動していることが判明する。塔東Tの遺構検出作業明瞭な遺構なし。金堂西T，基壇の端部の検討。瓦窯址の清掃，写真撮影。

12月7日　塔北Tの掘り下げ，南側に瓦溜りあり。塔東1Tの清掃。瓦窯址の平面，断面実測。

12月8日　塔北T，基壇の端部の検討。塔東1T，清掃，写真撮影。塔南T，平面・断面実測。塔基壇上面攪乱土層を掘り下げる。塔西Tの掘り下げ，西に掘り込みがあり，金堂の雨落溝の一部と推定。金堂西T，乱石積基壇の写真撮影，一部瓦の水洗作業。

12月9日　塔北T，瓦溜りの清掃。塔西T，写真撮影，平面実測。塔東1T，断面実測。塔東2T，表土掘り下げ。金堂北T，北西部へ拡張区を設ける遺構検出されず。

12月12日　塔北T，瓦溜り清掃。塔東2Tの掘り下げ，東端に大きな石がある。金堂北T，柱穴の検討，溝の掘り下げ。金堂西T，基壇と古墳時代の方形竪穴住居址が重っているのを検出。

12月13日　塔北Tの作業続行。塔東2T，掘り下げ，大きな石は後世に移動したものと判明。

12月14日　塔北T，瓦溜り掘り下げ完了。塔東3T，掘り下げ。南7Tを設定，掘り下げる南端に大きな土拡あり。南2T，断面実測。

12月15日　金堂北T，金堂西Tの写真撮影。南7Tの清掃。

12月16～17日　雨のため作業中止。

12月19日　水かえ作業。塔東2，3Tの清掃。金堂北Tの拡張区，埋め戻し。金堂北T，断面の検討，東壁断面実測。

12月20日　金堂北T，西壁実測。金堂西T，断面の検討，北壁実測，一部西側を掘り下げ，溝を検出する。塔北T，瓦溜り清掃，写真撮影，瓦の取りあげ作業。塔東2T，遺構の精査。

12月21日　塔東2，3T，遺構の精査，清掃，写真撮影，断面の土層検討。金堂北Tの南壁と西Tの東壁，南壁の実測。一部瓦の水洗作業。

12月22日　全体の清掃。塔東2，3Tの断面実測。南4，5Tの遺構検討。調査団会議を開く。

12月23日　塔北T，基壇の端部を確認。南4，5Tの遺構検討。塔東1T，塔南2T，塔西Tの埋め戻し作業。

12月24日　埋め戻し作業続行。塔北T，遺構精査，断面実測。南4，5Tの遺構・清掃，写真撮影。

1月9日　全体の水かえ作業。講堂東T，講堂北Tを設定。

1月10～12日　大雪のため現場作業中止。

1月13日　講堂東T，掘り下げ。塔東2，3T，平面実測。

1月14日　講堂東T，掘り下げ完了。講堂北T，掘り下げ。金堂北T，平面実測。南5T，西端土拡上層の遺物取りあげ。

1月18日　金堂西T，西半分埋め戻し作業。全体の水かえ作業。

1月19日　金堂北T，北半分の埋め戻し作業。南3T掘り下げ開始。講堂東T，写真撮影。南4T，割り付け作業。

1月20日　水かえ作業。南3T掘り下げ。自然の谷地形を呈することから地山まで下げずに終る。講堂東T，断面実測。

1月21日　南1T，掘り下げ開始。金堂南T，西半分の埋め戻し作業。講堂東T，平面実測。

1月22日　講堂東T，埋め戻し。金堂西T，西半分の埋め戻し完了。南6T，実測用割り付け作業。南2Tの断面検討。

1月24日　雨のため現場作業中止。

1月25日　水かえ作業。南2T，断面実測。南1T，掘り下げ。

1月26日　南1T，地山まで掘り下げ。南3T，掘り下げ。南6T，平面，断面実測。

1月27日　南1T，土層断面の検討。南4T，土坑実測。講堂東T，埋め戻し完了。塔東2T，3Tの埋め戻し作業。

1月28日　西4T，土坑実測，遺物取りあげ，塔東2T，3Tの埋め戻し作業。

1月30日　全体の水かえ作業。塔北T，平面実測，基壇部分を残して埋め戻し作業。南1T，遺構の検討，大きな土坑1個を検出する。

1月31日　金堂北T，金堂西Tの清掃。南1T，溝状の遺構を検討。土坑の掘り下げ。南1

Tと南3Tの写真撮影。土層断面の検討。

2月 1日　雪のため遺物整理作業。

2月 2日　南1T，南3Tの断面実測完了。
南3Tの埋戻し作業。

2月 3日　金堂北T，平面図の追加。金堂西T，平面実測。南1T，平面実測完了。南2T，埋め戻し作業。

2月 4日　南1T，南2Tの埋め戻し作業。

2月 6日　南4T，土坑実測。南1T，埋め戻し作業。金堂西T，基壇を残して埋め戻し。

2月 8日　南4，5，7Tの清掃。金堂西T，埋め戻し作業続行。吉野小学校生徒見学。

2月 9日　南4T，清掃・写真撮影。南7Tで柱穴を検出する。

2月10日　雨のため現場作業中止。

2月13日　全体の水かえ作業。南4T，南7Tの清掃，写真撮影。南5Tの遺構精査，鍛冶炉，大型の柱穴等を検出。南4T，幅1mで深く掘り下げる。南7Tも2本の柱穴が並ぶ。

2月14日　金堂北T，柱列の半分掘り下げ。南4T，掘り下げ続行。南5T，清掃，写真撮影。南7T，南端の大型土坑半分掘り下げ。稲田技官視察。

2月15日　講堂北Tの北半分では遺構を精査したが何も検出されず埋め戻し。金堂北T，柱列半分掘り下げ完了，写真撮影，断面実測。塔北T，南側も埋め戻し。

2月16日　金堂西T，乱石積基壇の実測。南5Tの平面実測。金堂北T，金堂西Tの残りを埋め戻し。

2月17日　南5Tの平面，断面実測完了。南4Tの掘り下げ作業は相当深くなり，下層は池状を呈していたことが判明し，地山まで掘り下げないことにする。金堂西T，埋め戻し完了。

2月18日　南5Tの断面図補足。南5Tの埋め戻し。

2月20日　南2T，土坑掘り下げ。南4T，土層断面実測。南7Tの柱穴半分掘り下げ。南側の大型土坑も掘り下げる。

2月21日　南4T，平面実測。南7T，断面・平面実測完了。南2T，土坑の掘り下げ。南4Tの埋め戻し。

2月22日　南2T，平面実測。講堂北T，掘り下げ。塔基壇に遣り方を設ける。平面実測。南4T，南7Tの埋め戻し。

2月23日　講堂北T，遺構検出，方形の掘り方の柱穴を検出。南7T，埋め戻し。西2T，一部埋め戻し開始。一部瓦の水洗い作業。

2月24日　南2T，土坑の掘り下げ，非常に深い。講堂北T，清掃，写真撮影，平面実測。塔基壇の実測。南2Tの埋め戻し。

2月25日　講堂北T，土層断面実測。金堂基壇に遣り方を設ける，一部実測。塔基壇の埋め戻し完了。南2T，土坑の平面・断面実測完了。南2Tの埋め戻し続行。

2月27日　金堂基壇の実測。塔と金堂周辺の現況図60分の1の平板実測図作成。道具，シート類の水洗い。

2月28日　遠景写真撮影。金堂基壇の埋め戻し完了。道具水洗。岡山へ荷物を運搬する。

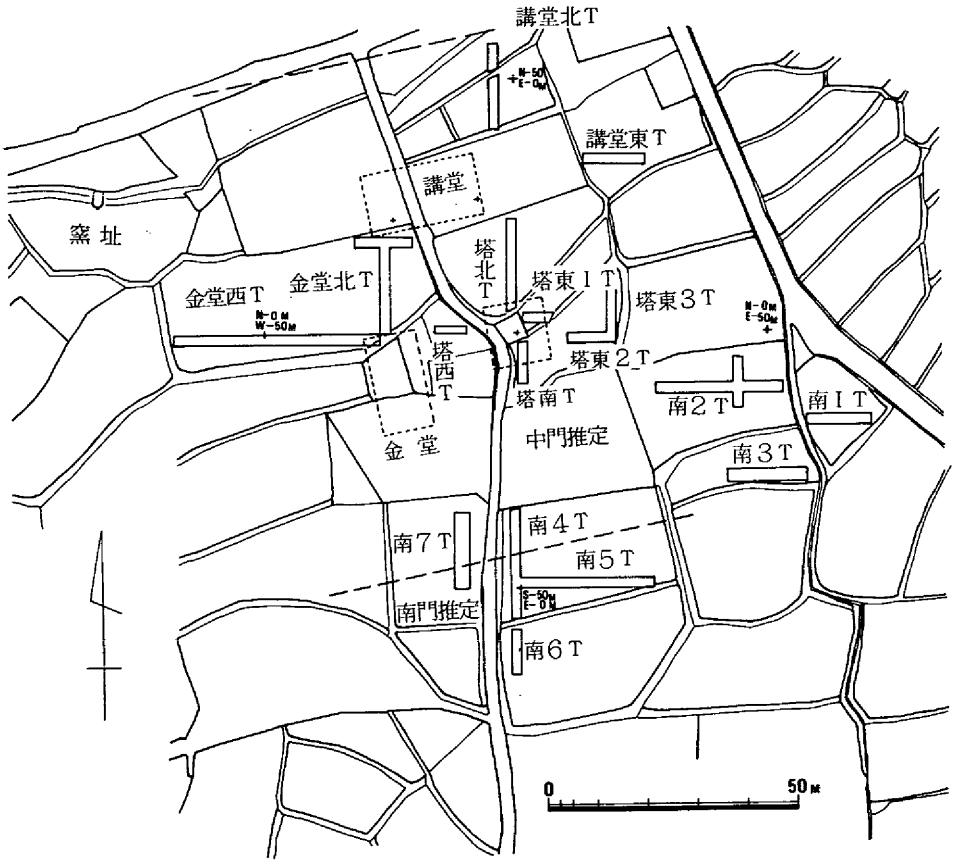
3月1～31日　遺物整理と報告書の作成作業。

第２章　発掘調査の概要

第１節　遺　　構

(1)　寺域の想定および発掘区の設定

寺域は塔心礎が判明し，西方の竹やぶに礎石があることから，これを金堂と推定した。北側の民家では調査に入る前の１０月１１日，増築工事の際，直径４５cmの掘立柱が確認された。周辺の地表観察の結果，塔と金堂と推定される建物は北から南へ緩やかに傾斜する高まりの上に立地し，東側と西側には谷地形が存在する。このことから，方１町（約１００m四方）の寺域を想定した。南にはかなりな広がりがあって，これについても確認する必要があった。グリッドの設定はまず，塔心礎が移動してないものと判断されることから，この中央の穴の中心を原点とし，真北に主軸を設けて，所々に杭を置いた。



第２図　　トレンチ配置図

塔基壇の規模，状況を知るため東，西，南，北にそれぞれトレンチを設定し，東側には，さらに回廊等の有無を調べるため２本のトレンチを設けた。金堂については北と西へトレンチを設定した。東は池があり，塔西トレンチと関連している。南側は民家があって，約２ｍの崖になっていることからトレンチは設定しなかった。東側に面した池の断面に３個の礎石が傾いたまま存在し，西側にも礎石があることから，一部竹やぶを掘り込んで調査したところ，礎石列がよく残存していた。講堂と推定されるところは民家になっていて，東側へトレンチを設定した。北側へは僧房を調査するため１本のトレンチを設定した。南門の所在すると推定される水田へは南北に３本，東西１本の長いトレンチを設けた。中門の位置と推定されるところは民家があって調査できなかった。寺域の東限を確認するため３本のトレンチを設けた。西限を確認するためには金堂の西側トレンチを延長した。寺域からははずれるとおもわれた北西部において，溝の改修工事中，瓦窯址１基が発見され，一部を調査した。

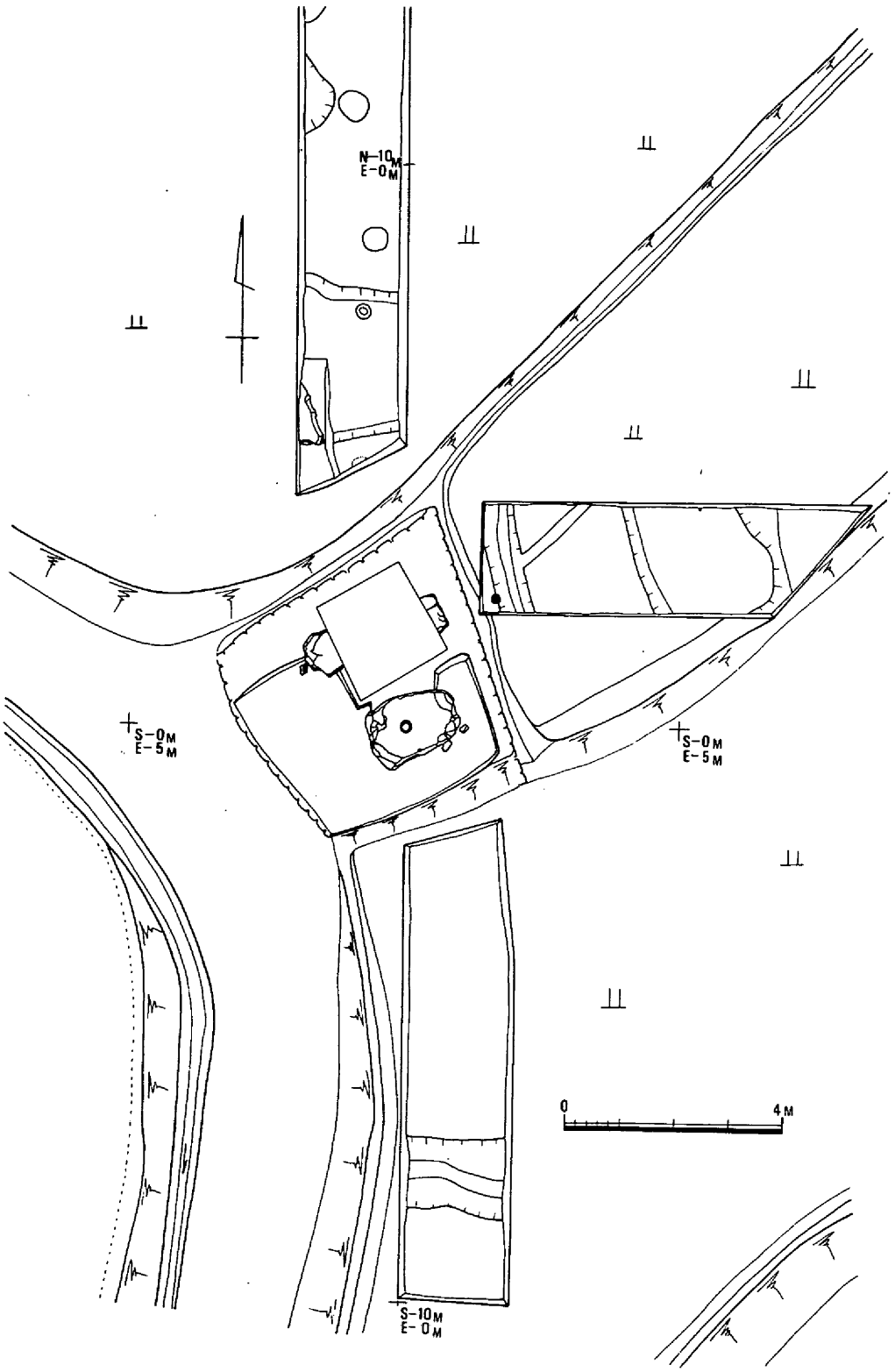
(2) 塔　址（第３，４図，図版２）

塔址は心礎が古くから知られており，寺址として認識される根拠となったものである。現在，心礎のすぐ北側には薬師堂が建っており，薬師像が祀られている。東西４ｍ，南北５ｍ位の場所が薬師堂の敷地になっている。この部分の表土を除去したところ，薬師堂の基壇の下に２個の礎石が検出された。四天柱の柱にあたる位置で，高さは塔心礎と変らないが２個の距離は1.8ｍを測るが心礎の中心から1.6ｍも北に寄っていて，原位置を少し移動している。心礎の大きさは東西1.7ｍ，南北1.1ｍ，厚さ約60cmを測り，長軸は真北に対してＮ72°Ｅである。心礎には直径21cm，深さ13cmの円形の穴がある。四天柱にあたる北側の２個は，現在の薬師堂の下に入っているので正確にはわからないが，南北80cmと73cmの大きさである。上面のほぼ中央部が磨滅している。心礎の周辺を掘り下げると黒褐色粘土層になるが，これは古墳時代以前の包含層になっている。版築等のあとは確認されなかった。表土層からは近代の瓦にまじって，当時の瓦と水煙の破片，それに弥生時代の環状石斧１点が検出された。

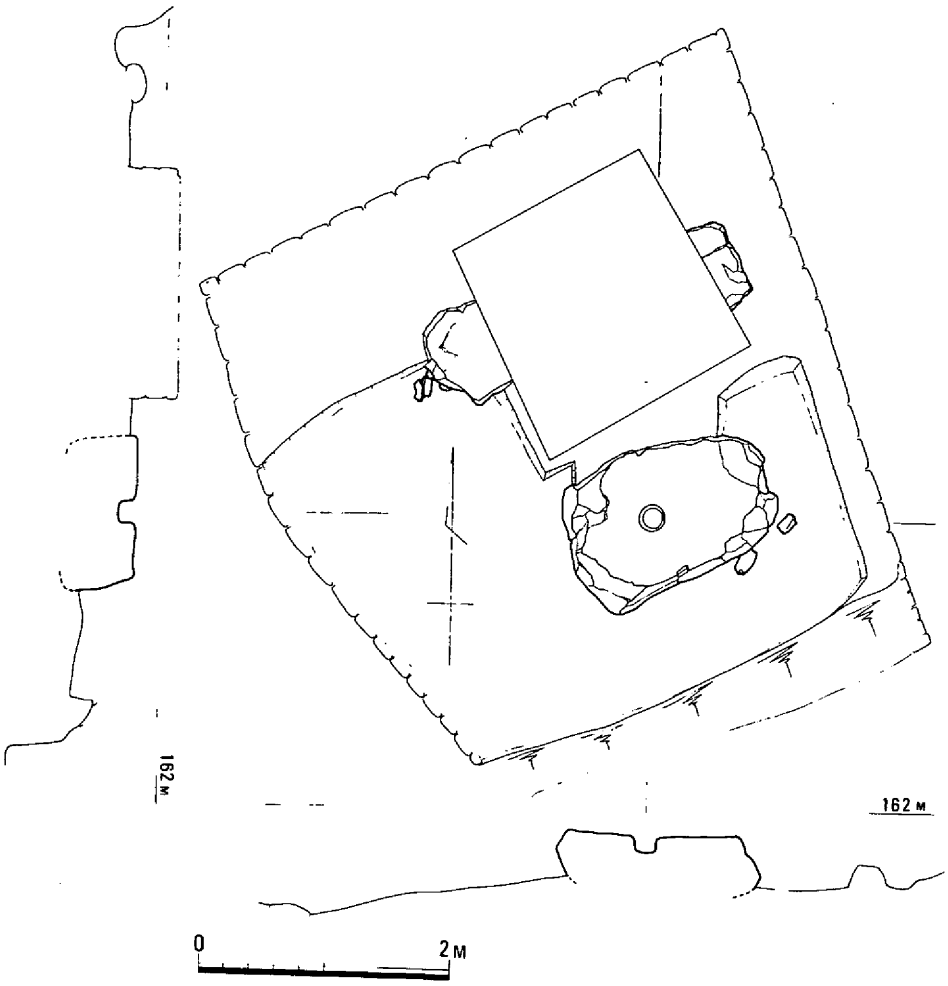
塔北トレンチでは，礎石が１個確認されたが，下部に瓦の包含層があり，基壇から少しはずれるので移動しているものと判断された。基壇の端は約20cm位の高さが残っていた。鉄分が凝集していて，堅く明瞭に区分された。基壇の端部の方向はＮ80.5°Ｅである。心礎の中心から基壇の端までの距離は5.4ｍを測る。基壇の大きさは一辺10.8ｍとなり，基壇化装等は何も確認されなかった。

塔西トレンチ（第５図）は道をはさんで西側の畑地へ設定した。道があって，原点から西へ10ｍの位置からしか設定できず，塔に関係する遺構は検出されなかった。トレンチの南壁近くに方形の掘り方をもつ柱穴が１個検出された。１辺90cmの大きなものである。西側端部には約7cmの段があり，金堂の雨落溝の一部と判断された。その他の柱穴は円形の掘り方で小さく，弥生時代から古墳時代の柱穴と考えられる。

塔南トレンチは，心礎の位置より約１ｍ低い水田になっていることから，すでに削平されて，塔に関係する遺構は検出されなかった。下層には寺以前の包含層が薄く存在した。原点より南へ８ｍ



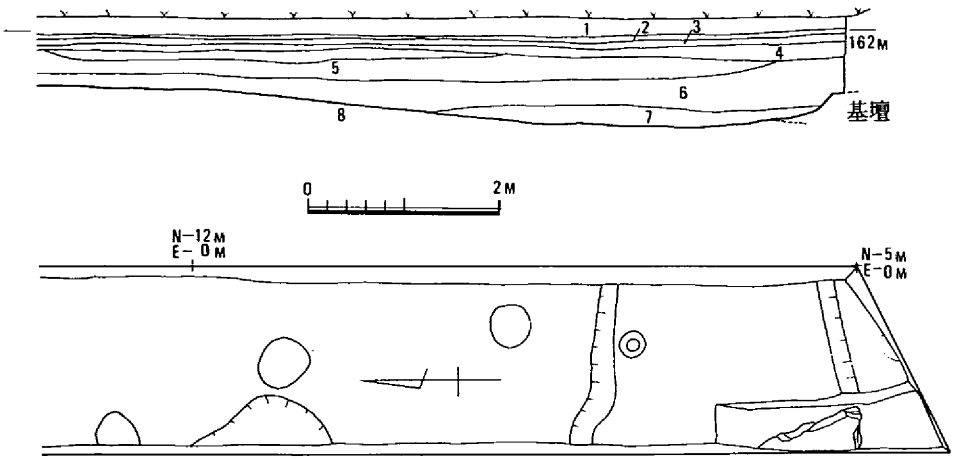
第3図　塔基壇実測図(1)



第4図　塔基壇実測図(2)

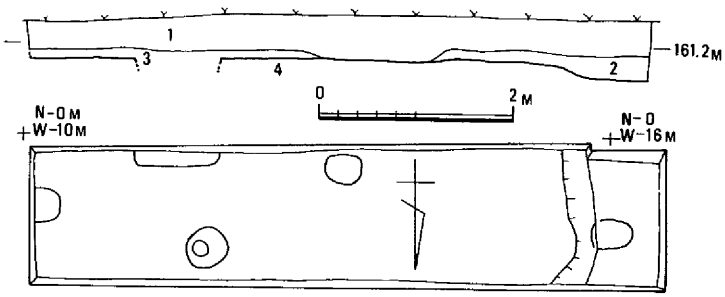
の位置に東西方向の溝が検出された。瓦は上層からまとまって出土した。素弁16弁蓮華文の軒丸瓦が6点ある。

塔東1トレンチも水田でかなり削平されている。東へ7m位のところからかなり傾斜していて，旧地形でも下がっていたと推定される。塔東2および3トレンチは塔南トレンチと同じ水田の中に設定した。原点より東へ10mの位置から10mと北へ折れまがって9mである。東端に大きな石が1個検出されたが，上層から切り込まれた状況から水田造成の際，穴を掘って沈めたものと判断された。大きさからして，礎石につかわれていたものと考えられる。東20mあたりにも傾斜面があって，瓦を多量に含んでいる。この傾斜も自然の地形と考えられる。他に多数の柱穴が検出されたが，いずれも寺以前のものと推定される。回廊等に関するものは検出されなかった。塔心礎のある北側の畔と下側の畔に計3個の礎石があり，水田造成の際，移動していることが判る。



第5図　塔北トレンチ実測図

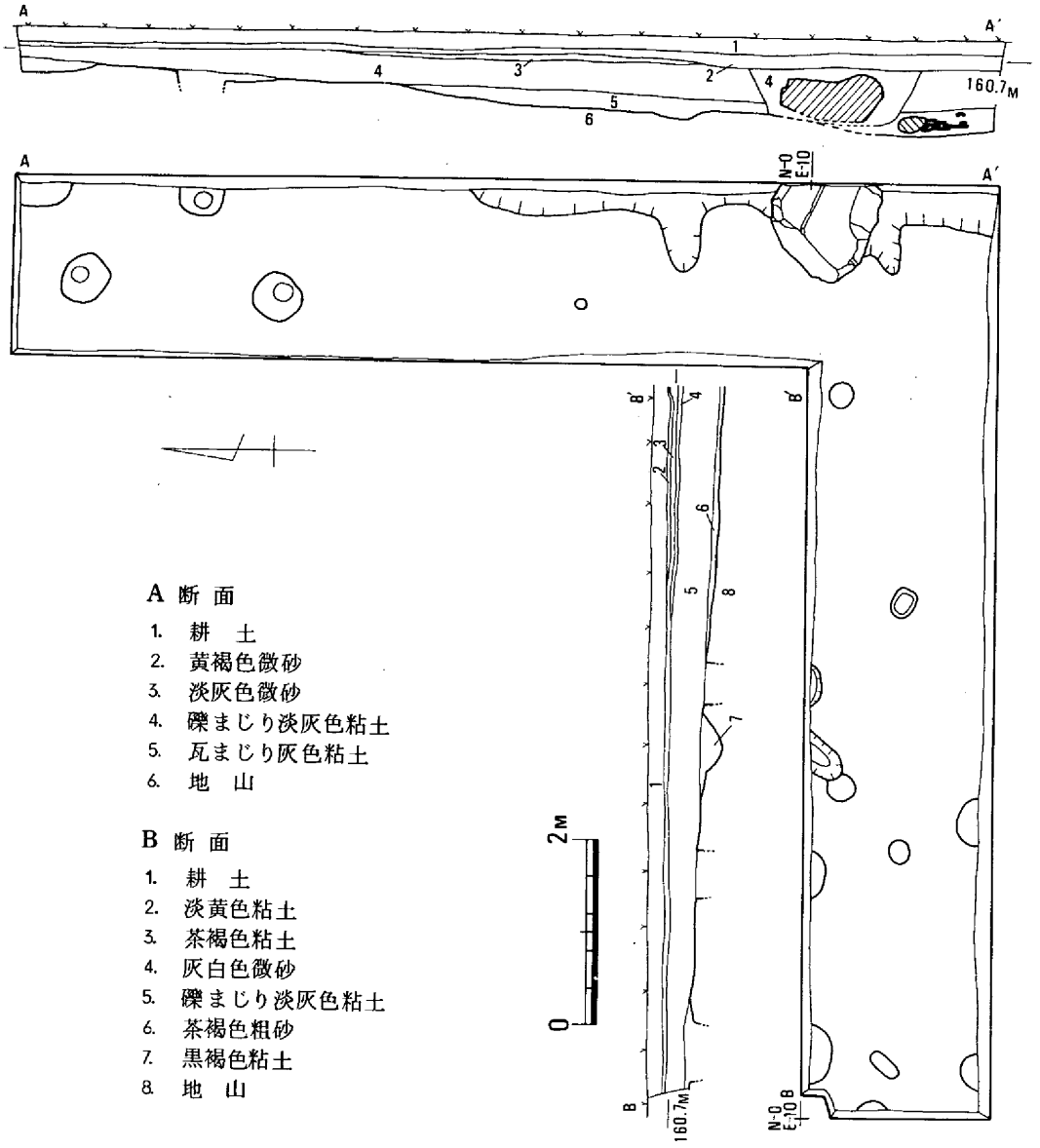
1. 耕　土
2. 黄褐色微砂
3. 淡青灰色微砂
4. 礫まじり淡灰色微砂
5. 淡青灰色微砂
6. 暗灰褐色粗砂
7. 黒褐色粗砂
8. 地　山（礫まじり黄褐色粘土）



第6図　塔西トレンチ実測図

土層名

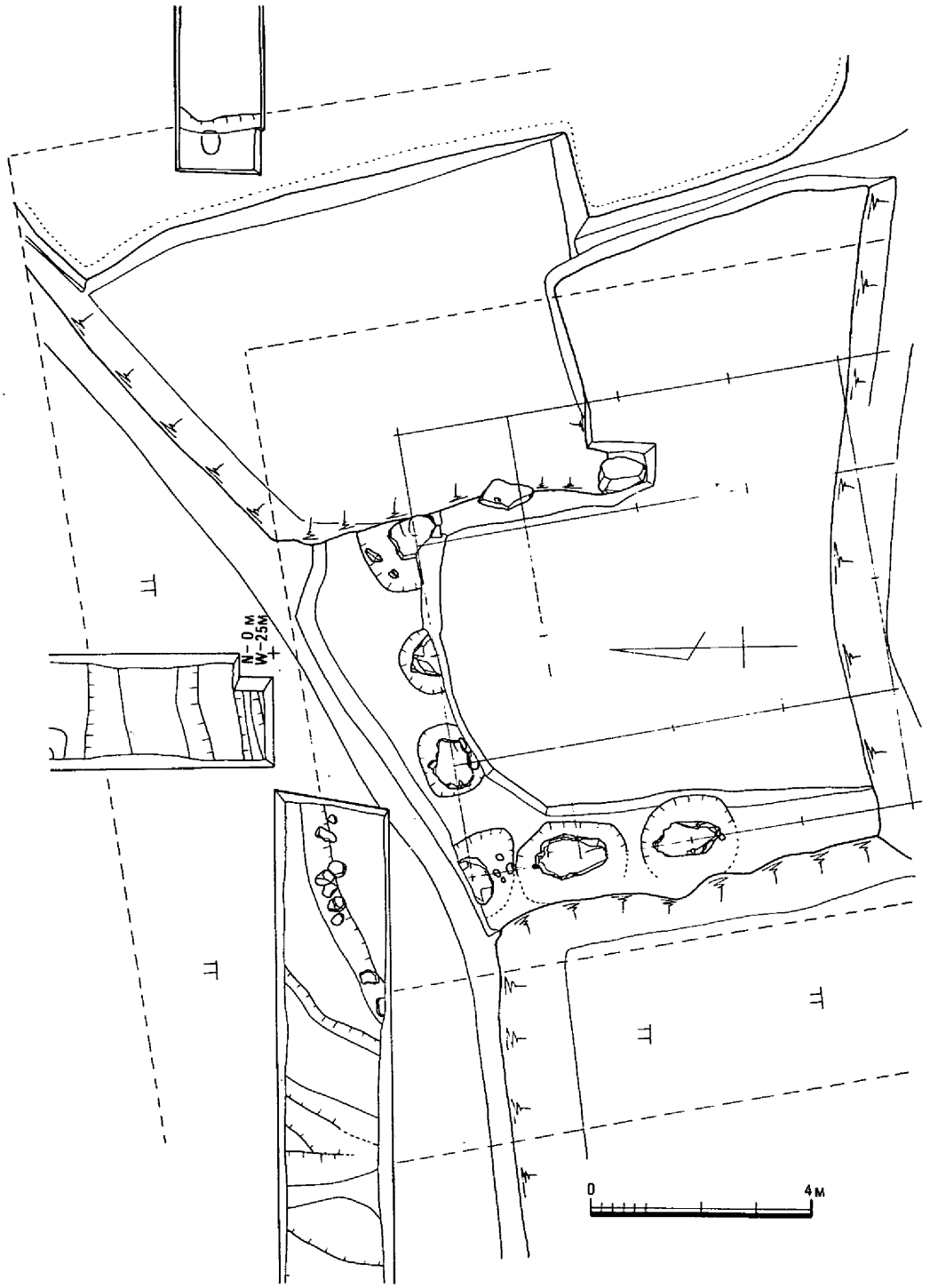
1. 表　土
2. 灰色粘土
3. 黒褐色粘土
4. 地　山（黄褐色粘土）



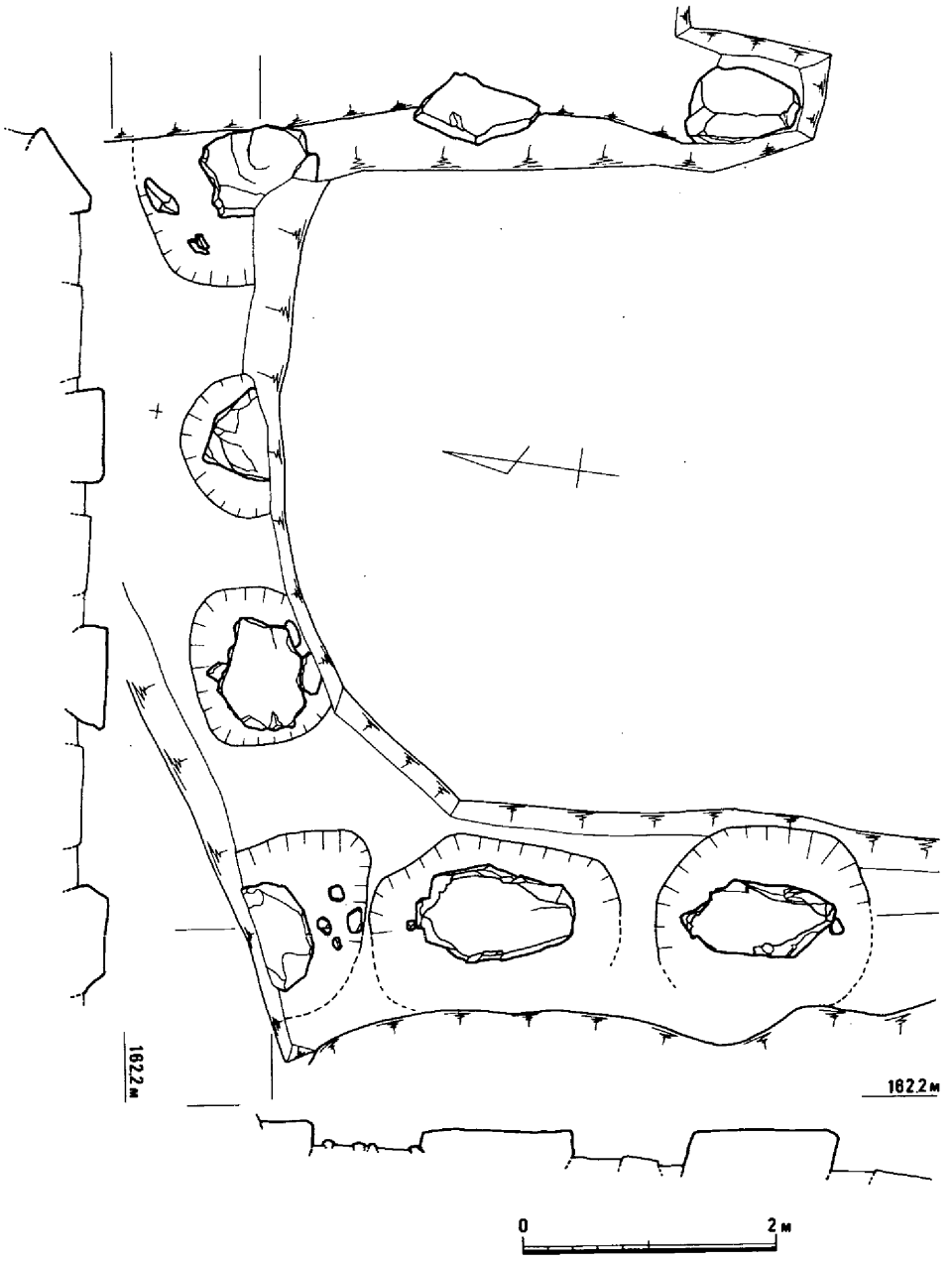
第7図　塔東2・3トレンチ実測図

(3) 金 堂 址（第8・9図，図版3・4）

塔址の西方に竹やぶがあり，一部に礎石が露出していた。竹やぶの北東側に防火用水の池があり，これによって，一部基壇が削られているが，この池に面した側に3個の礎石が傾いて露出していた。西側にも，1個の礎石が露出していた。竹やぶの中には荒神社が祀られている。露出していた礎石をもとに他の礎石を検出するため，竹やぶの一部を掘り込んだところ，北側の礎石列が残存していた。礎石は黄褐色粘土の中に切り込まれた掘り方中に原位置を保っていた。掘り方内を若干掘り下げると根石も一部確認された。北側の礎石は4個並んでいて，東側の1個は池へ傾斜している。

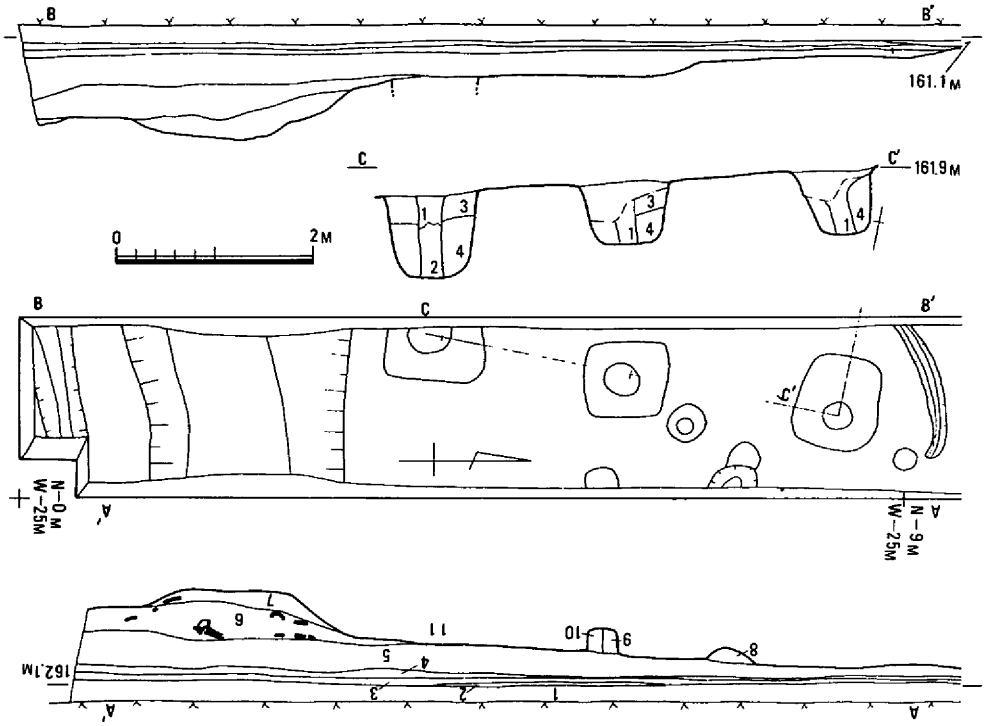


第8図　金堂基壇実測図(1)



第9図　金堂基壇実測図(2)

余り長ての石はないが，長辺を東西方向にあわせてある。西側の礎石は北側と重なる1個を除いて2個存在し，いずれも長ての石で南北に並べている。池に面して傾斜している石も平坦面は南北に長く設置してある。竹やぶの中心部分は掘り下げることをしなかったため礎石列の完全な復元は難



第１０図　金堂北トレンチ実測図

A 断面

1. 耕　土
2. 帯黄青灰色微砂
3. 黄褐色微砂
4. 淡青灰色粗砂
5. 暗灰色粗砂
6. 暗灰色粗砂（瓦を含む）
7. 黒色粘土
8. 淡灰色粗砂
9. 黒褐色粘土
10. 黄褐色粘土まじり暗灰色粗砂
11. 地山

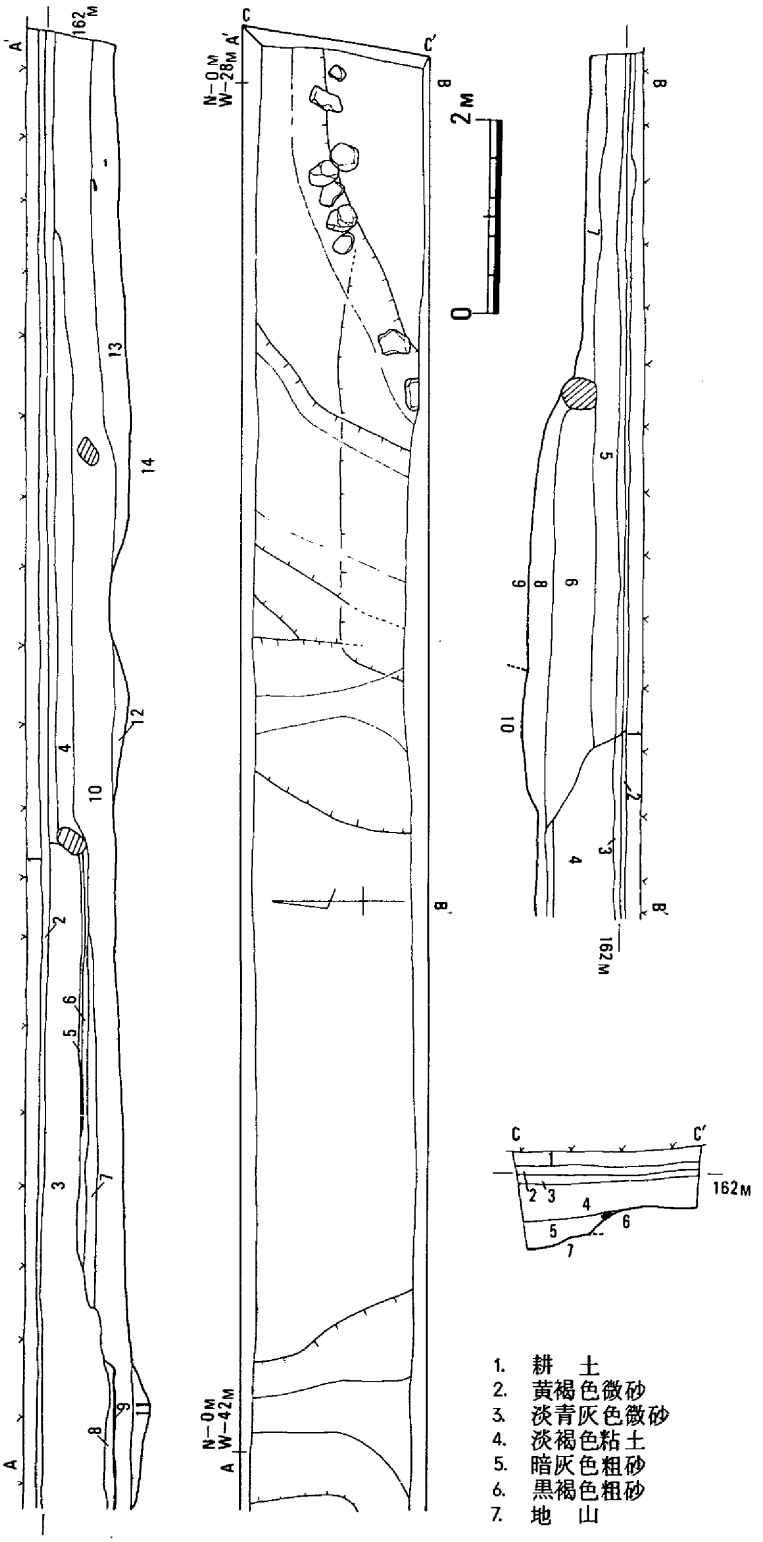
C 断面

1. 黒色粘土
2. 灰色粘土
3. 黒褐色粘土
4. 黄色粘土まじり灰色粘土

しいが，ほぼ次のように判断される。東西の柱間は１９５cmで４個の石が並ぶがさらに東に１個存在したと考えられる。その南側は削平されて残存しないことから明瞭でないが，身舎は３間×２間で南北に長く考え，東，西，北に庇があり，おそらく，南にも庇が存在するものと考えられ５間×４間で南北に長く，東に面した建物が想定される。南は民家のため２m位の崖があり，かつて，かなり削られたものと判断される。南北の軸線はＮ８.５°Ｗである。したがって東西方向の軸線は　Ｎ８１.５°Ｅとなる。

礎石の大きさは，西側の長いものが長さ１２７cm，幅７６cmと長さ１２３cm，幅５７cmを測る。北側では大きさが測れるのは北西隅より東へ２個目のものだけで，これは長さ９０cm，幅６７cmの大きさである。

基壇の上面の調査では鴟尾の破片の複弁の瓦，鉄釘等が検出された。



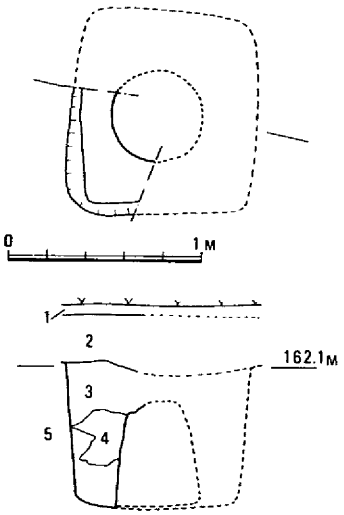
A　断　面

1. 耕　土
2. 黄褐色微砂
3. 造成土
4. 淡褐色粘土
5. 青灰色微砂
6. 帯黄青灰色微砂
7. 粗砂まじり淡灰色微砂
8. 青灰色微砂
9. 黄褐色粘土
10. 暗灰色粗砂
11. 暗灰色粘土
12. 黒褐色粘土
13. 暗灰色粗砂
14. 地　山

B　断　面

1. 耕　土
2. 黄褐色微砂
3. 淡青灰色微砂
4. 造成土
5. 暗褐色粘土
6. 暗灰色粗砂
7. 淡褐色粘土
8. 黒褐色粘土
9. 住居址埋土
10. 地　山

第１１図　　金堂西トレンチ実測図



第１２図　柱穴実測図

1. コンクリート
2. 灰褐色粘土
3. 黒褐色粘土
4. 黄色粘土
5. 地　山

金堂北トレンチ（第１０図）では北柱列から３.４ｍの位置に幅４０cmの東西方向の溝が検出され，このすぐ北側に幅約２ｍ，深さ約５０cmの東西方向の溝があり，この中には瓦が多量に検出された。複弁の軒丸瓦で円形に残存するもの，重弧文の軒平瓦，鉄釘などが堆積していた。地山は礫まじり黄褐色粘土である。溝の北側にはほぼ南北に並ぶ大型の柱穴列があり，建物址である。これについては後で述べる。その他にも小型円形の柱穴があるが，寺以前の柱穴と判断される。

金堂西トレンチでは基壇の一部が検出された。川石が南北方向に並んで約１０個検出された。若干移動しているが，乱石積基壇の一部が残存しているものと判断された。石の大きさは揃っていないが長さ３０cm位のものである。基壇の北側には金堂北トレンチから続く幅の広い溝がある。さらに西側にも浅い２本の南北方向の溝が検出された。基壇の高い部分には黒褐色粘土層があり，溝で削られた部分は地山があらわれて黄褐色粘土である。基壇の西北隅には方形の竪穴式住居址が切り合っているのが検出された。掘り下げていないので明瞭でないが，古墳時代の住居址と推定される。西側礎石列のすぐ西側が２ｍ位の崖になっている。この断面の観察によると地山の上には６０cm位の包含層があり，南へ傾斜している。上層は黄褐色粘土で，この土層が金堂基壇造成土である。版築等はみられない。下層の包含層中からは断面清掃中に古式土師器と鉄鏃２点が検出された。

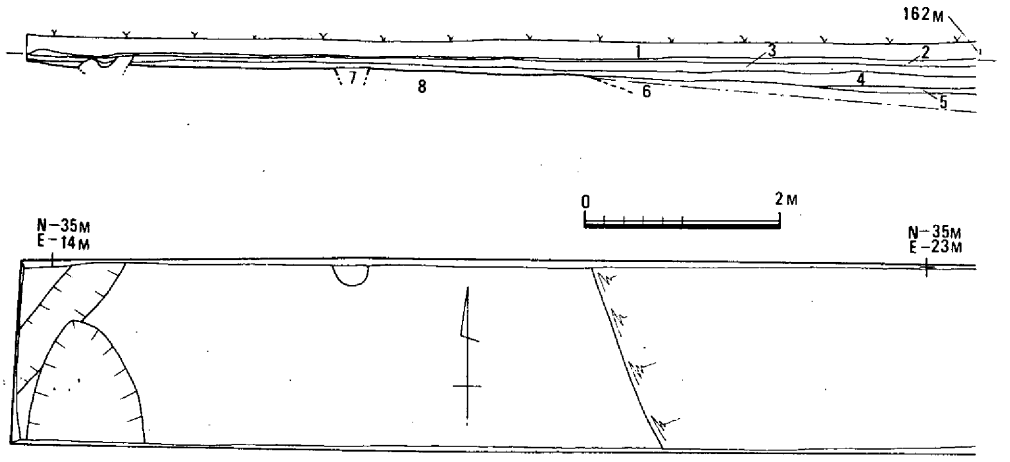
(4)　講堂址（第１２図，図版６－１）

塔址と金堂址の北側に民家が２軒並んでいて調査できていない。ここには礎石があったということは誰も知らないし，周辺の崖面にも礎石とおもわれる石は存在しない。調査に着手する前の１０月に民家の増築工事のため掘り下げたところ，方形の掘り方の柱穴が検出され，直径４５cmの桧柱の下部が残っていた。調査中の聞取りでは，先の柱より西へ１８ｍ位のところで石垣をつくる際にも柱が出土したことが判った。柱材の大きいことなどから掘立柱による講堂である可能性が高い。金堂北トレンチでも掘立柱立建物があり，礎石建物以前の建物で塔や金堂が存在した時にも建っていたことを断定する材料はない。

講堂東トレンチでは東へ自然に下がる傾斜面が検出されただけで寺に関係する遺構は存在しない。

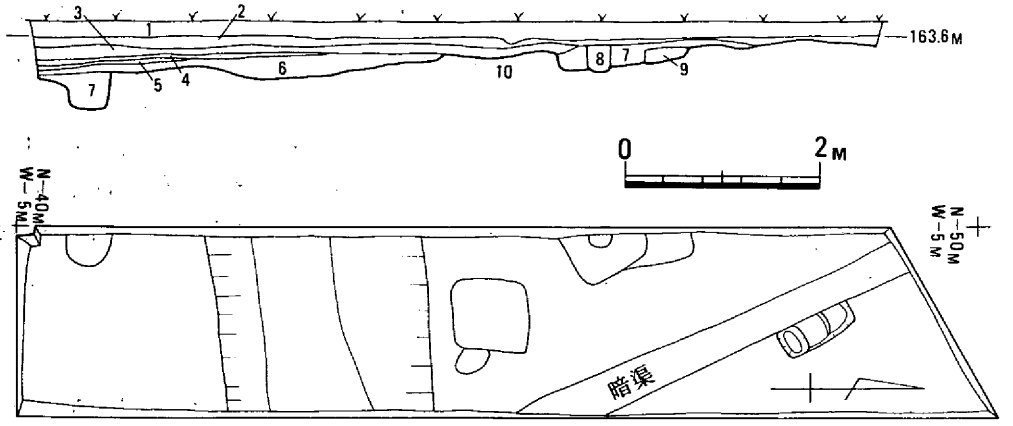
(5)　僧房址推定地域（第１４図）

講堂北トレンチとして設定したもので２枚の水田にわたっている。北側の水田では耕土直下が地山となり，まったく遺構は検出されなかった。南側では方形の掘り方をもつ柱穴があり，僧房関係



第１３図　講堂東トレンチ実測図

1. 耕　土
2. 黄褐色粘土
3. 礫まじり灰褐色粘土
4. 灰色粘土
5. 暗灰褐色粘土
6. 黒色粘土
7. 黒褐色粘土
8. 地　山



第１４図　講堂北トレンチ実測図

1. 耕　土
2. 礫まじり灰色粘土
3. 淡黄褐色粘土
4. 淡青灰色粘土
5. 淡灰色粘土
6. 礫まじり黒褐色粘土
7. 黒褐色粘土
8. 茶褐色粘土
9. 礫まじり茶褐色粘土
10. 地　山

の掘立柱建物の一部の可能性が推定された。金堂北トレンチの掘立柱建物に関する可能性が残されている。　掘り方の大きさは１辺８０cm位であり，上部が削平されているため残存状況は悪い。柱痕の判るものでは直径２３cmを測る。周辺を拡張していないので建物の方向，規模等はまったく不明である。このトレンチからは円面硯の破片が１点出土している。他に弥生式土器，土師器，須恵器の破片も出土している。

(6)　南門推定地域（第１５・１６図，図版５）

塔の南３５mから南へ南北方向のトレンチを３本設定した。南北方向の農道の西側トレンチ（南７トレンチ）では，２本の柱穴が検出された。水田造成の際にかなり削平されたようで，柱穴は深さ１０cm位しか残存していない。２本の柱穴の掘り方はほぼ円形で，南側の柱穴では直径３２cmの柱痕跡が明瞭にみられる。掘り方は約１mを測る。方位はN 8.5°Wで，柱間は２７０cmである。方位からすると金堂と同じで，南門の一部と考えることもできる。塔から南へ約４０mの位置である。トレンチの南側では大型の土坑があり，瓦片等が入っている。

農道の東側のトレンチ（南４トレンチ）では，南４８mのところに円形の土坑１個があり，土師器の杯と瓦片が入っていた。ここでは南北１２mの大きな土坑があり，幅１mで掘り下げたところ深さ１mでは地山に達せず，土層の観察からすると池状になった大きな穴を地山の土で埋めたあとであることがわかった。下部の灰色粘土中には瓦が多く，鴟尾の大型破片や重弧文の軒平瓦等も出土している。きわめて深くなるため地山までは掘り下げなかったが，この土坑が掘られた時はすでに礎石建物はなくなっていたと判断される。南側では小型円形の柱穴が検出された。南４８m付近の土坑は楕円形を呈し，浅く，灰色粘土で埋まっている。下部には瓦片もあるが，土師器の杯が多く検出された（第１７・１８図，図版７－２）。土坑の大きさは 2.5 m，東西 2.2 m，深さ３０cmを測る。土師器の杯はやや深いもの（第１８図１～６）と浅いもの（第１８図７～２６）がある。底部には糸切り痕が明瞭に残っている。胎土には細砂を含み，色調は灰白色ないし黄褐色を呈する。大きさは，大きなもので直径１2.6cm，深さ4cm，小さいもので直径 8.6cm，深さ 2cm位である。時期は平安時代末か鎌倉時代初期と推定される。さらに南へのばした南６トレンチでは新しい時期の溝だけで遺構は何も検出されなかった。

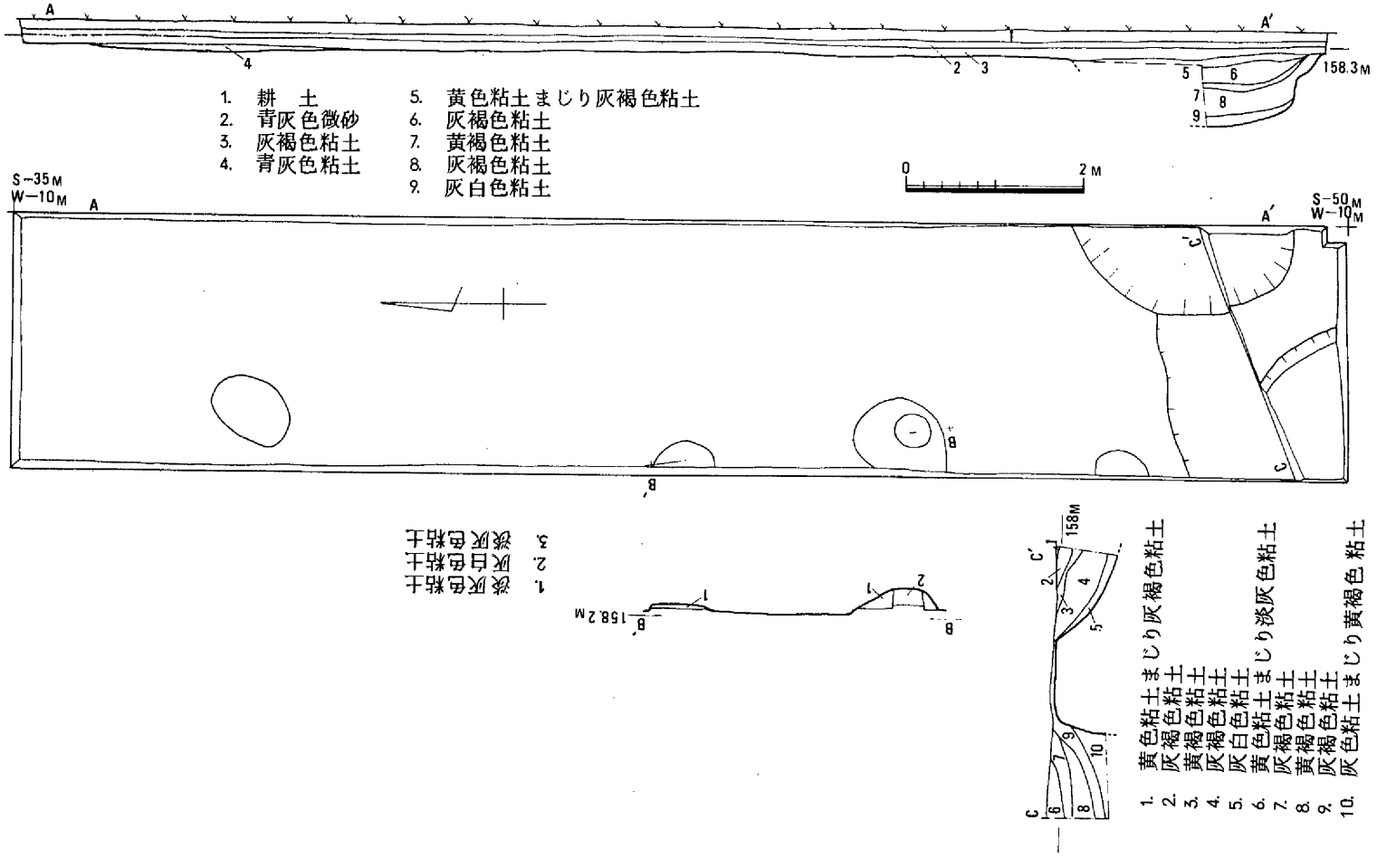
(7)　中門推定地域

塔址と金堂址の南側には２軒の民家が東西に並んでいて，中門と推定されるところは調査できなかった。

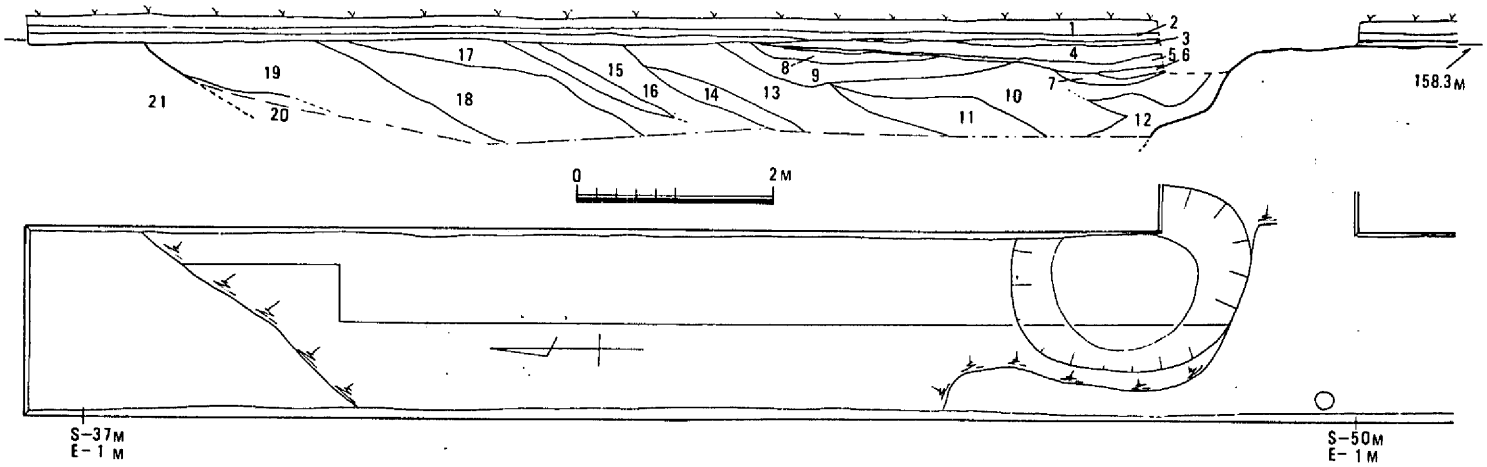
(8)　その他の建物址

以上の他に金堂の北側に１棟の建物，塔西トレンチに柱穴，南５トレンチの東端部で柱穴が検出された。

金堂の北側の建物は，トレンチ内に３本の柱穴が並び北側の柱から西へ2.1 mの位置を確認すると柱穴があり，建物であることが判明した。南北に並ぶ柱穴の東側半分を掘り下げて断面を観察し

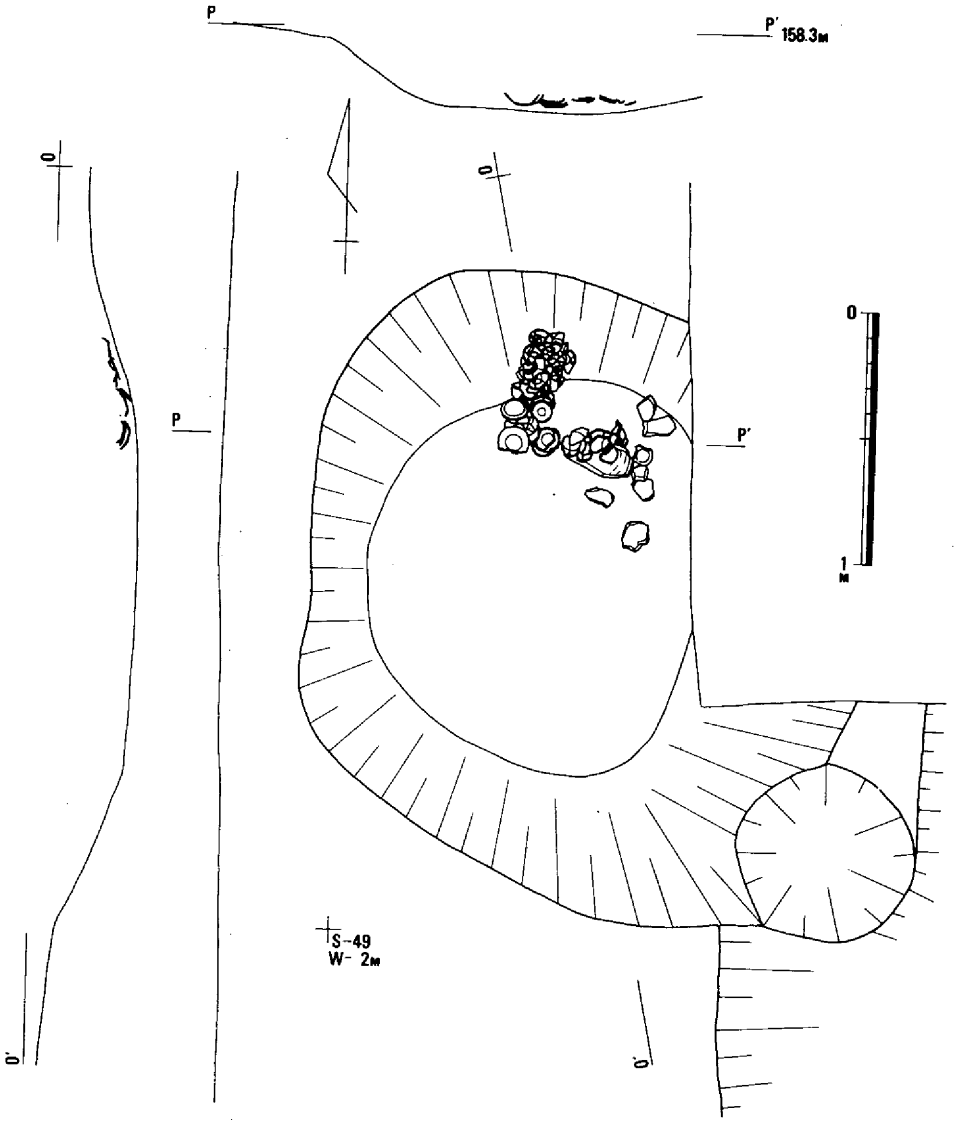


第１５図　　南７トレンチ実測図



第１６図　　南４トレンチ実測図

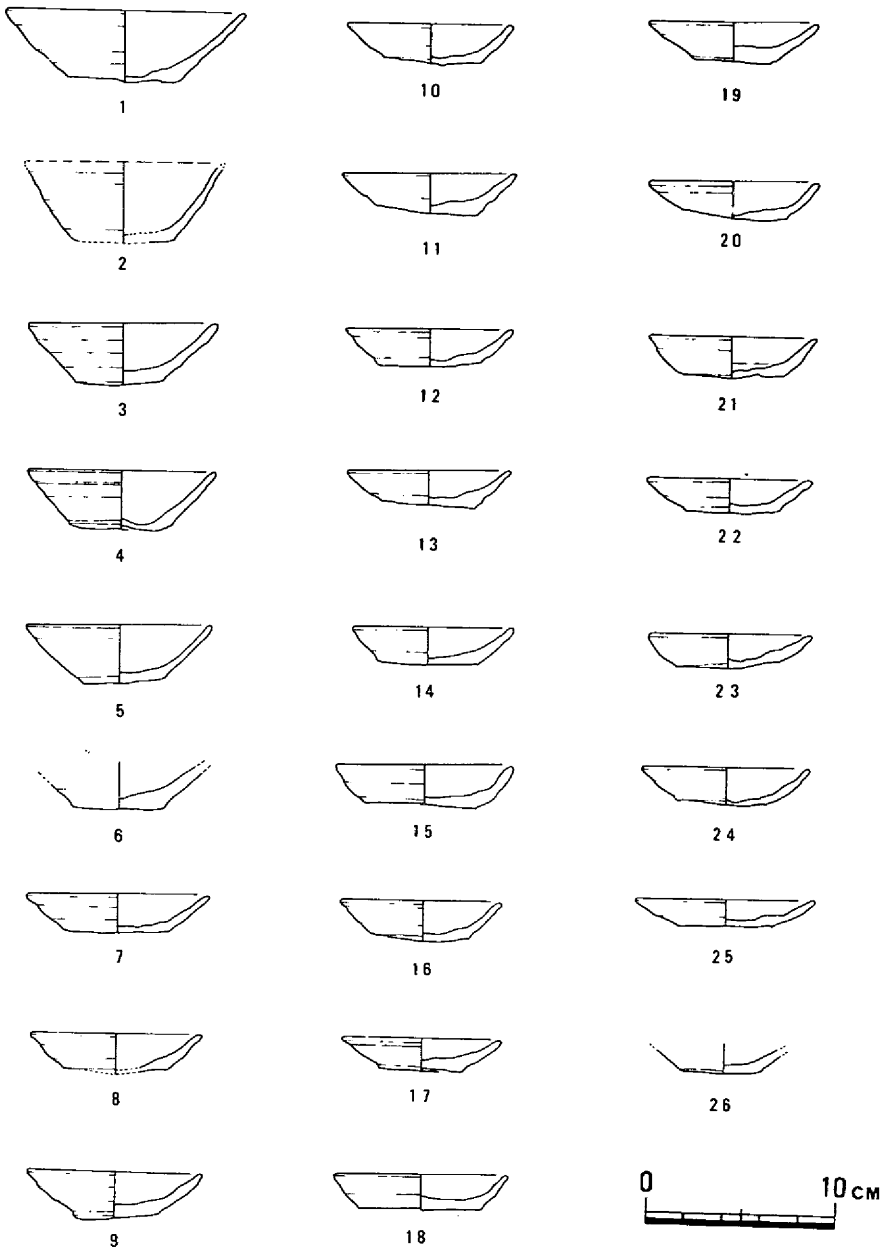
1. 耕　土
2. 青灰色微砂
3. 淡黄色微砂
4. 礫まじり灰色粘土
5. 灰色粘土
6. 黒色粘土
7. 淡灰色粘土
8. 〃
9. 灰色粘土
10. 黄褐色粘土
11. 灰色粘土
12. 〃
13. 黄褐色粘土
14. 暗灰色粘土
15. 黄褐色粘土
16. 淡灰色粘土
17. 黄褐色粘土
18. 暗灰色粘土
19. 黄褐色粘土
20. 暗灰色粘土
21. 地山（黄褐色粘土）



第17図　南4トレンチ・土坑実測図

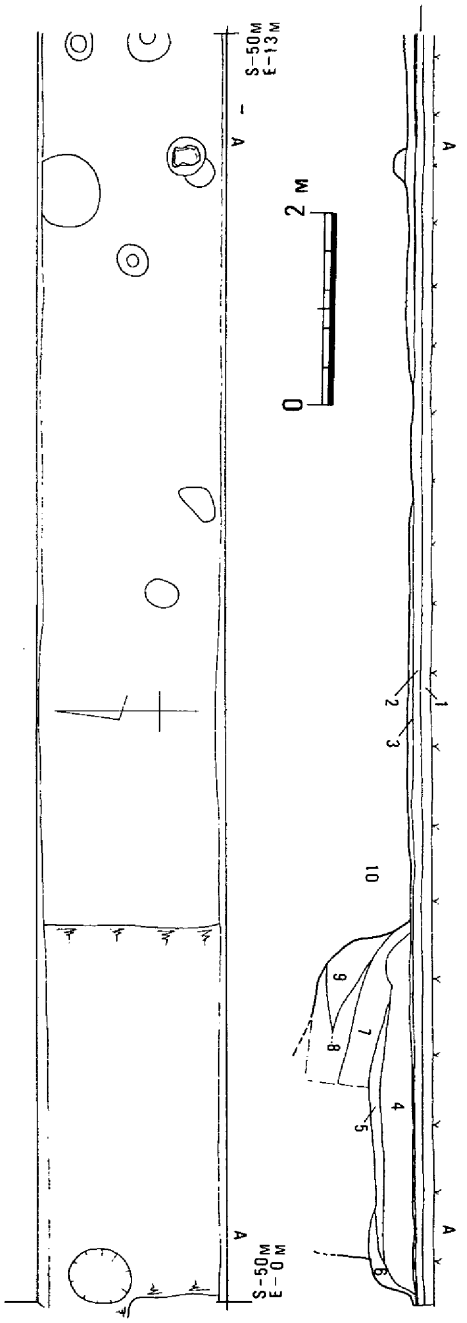
たところ，いずれも柱そのものは残存していなかったが柱痕跡は明瞭であった。北側の柱はやや南へ傾いているが，3本の柱間は約220cmである。柱穴の掘り方は方形で90cmから1mを測り，深さは南のものでは90cmである。建物の南北の軸線はN11.5°Eをさし，金堂等との方向とかなり異る。柱穴の埋め土中から第31図1の須恵器杯片が検出された。

南5トレンチの東部でも方形の掘り方の柱穴が検出された。南50m，東24m付近の位置で，一辺80cmあり，柱痕がわずかに残っていた。柱材は桧である。痕跡から復原すると直径20cmとなる。柱穴は2個切りあっている。周辺部へ広げていないので，どのような建物になるかは明らかでない。塔西トレンチで確認された柱穴もどのようなものになるかわからない。金堂北の建物では



第１８図　南４トレンチ土坑出土土師器実測図

掘り方中の須恵器が伴うとすると７世紀中頃までさかのぼり，礎石建物の時期よりも古く，この時期に掘立柱建物群が存在していたことになる。これらが寺であったのかそれ以外の建物であるかについては判断することが難しい。



第１９図　南５トレンチ実測図 (1)

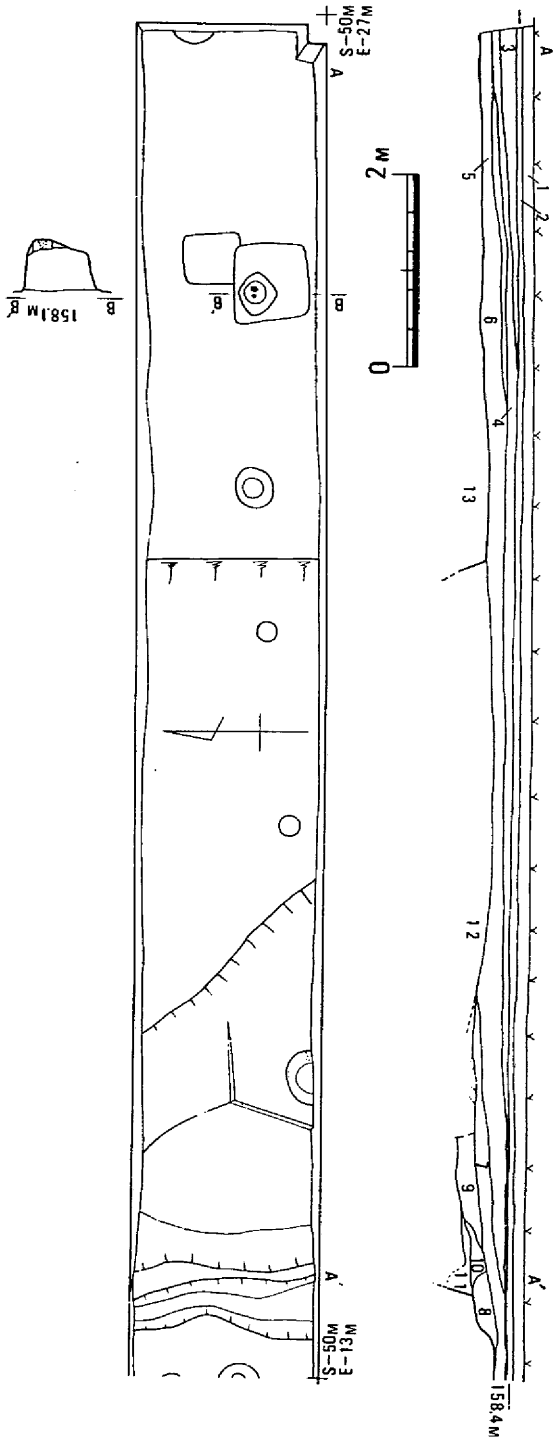
1. 耕　土
2. 青灰色微砂
3. 礫まじり灰褐色粘土
4. 礫まじり灰色粘土
5. 灰白色粘土
6. 灰色粘土
7. 黄褐色粘土
8. 暗灰色粘土
9. 黄褐色粘土
10. 地　山

(9)　その他のトレンチの状況

南５トレンチ（第１９，２０図）は西端部に南４トレンチからつづく大型の土坑がある。東へ寄った地点には幅８ｍの大型土坑があり，同種類の土坑と判断される。これらの土坑が埋められた上面に円形の柱穴があり，掘り方中に瓦片を含むことから寺以後の小さな建物の存在が知られる。東１６ｍ付近には小さな鍛冶炉が１基検出された。中世のものと推定される。

南１トレンチ（第２１図）は南１８ｍ，東５８ｍから東７０ｍ付近へ設定したものである。東側が高くなって，黄褐色粘土の地山がある。北壁近くに黒色粘土で埋まった土坑が１個検出されたが，遺物は含まれていなかった。西側は谷地形になる肩部近くで自然の溝と推定されるものがあり，須恵器，土師器の破片が検出された。

南２トレンチ（第２１図）は「金堂ヤ」と呼ばれる屋敷地のあとで，清掃したところ，明治頃のものとおもわれる礎石列が現われた。トレンチは南１０ｍ，東２７ｍから東５３ｍ付近へ設定した。東３０ｍから約４ｍの間は南北方向の溝状を呈している。自然の谷地形と判断される。西側には長方形の土坑があり，埋土中から土器が検出された（第３３図７，１２）。土坑の大きさは現長７０cm，幅５４cm，深さ３５cmあり，黒色粘土で埋っていた。溝状のものの東側にも方形の土坑が１個検出された。大きさは８０cm×７０cm，深さ５４cmである。東部では大型の土坑２個が検出された。東側のものは方形の掘り方で内部に断面方形の柱材が２本斜めに埋っていた。あまり腐蝕していないものである。伴出遺物がなくて，年代は明らかでない。西側のものは円形の掘り方で直径 1.5ｍ，



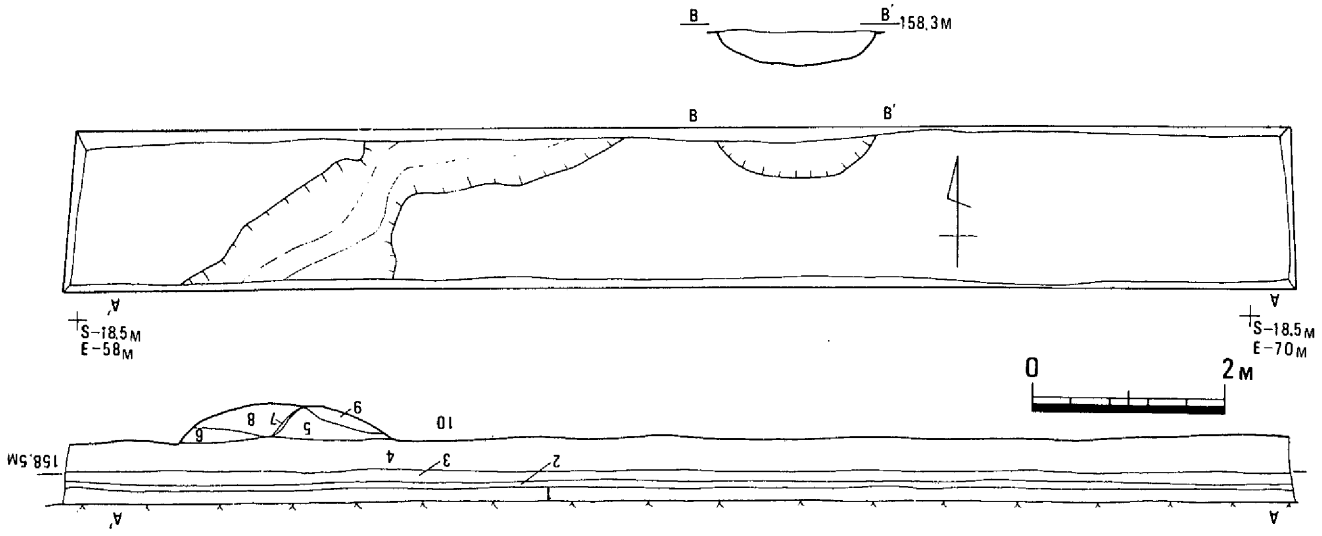
第２０図　南５トレンチ実測図 (2)

1. 耕　土
2. 青灰色微砂
3. 礫まじり淡灰色粘土
4. 黄褐色粘土
5. 淡灰色粘土
6. 礫まじり灰色粘土
7. 暗灰褐色粘土
8. 礫まじり灰色粘土
9. 黒色粘土
10. 黄褐色粘土
11. 灰色粘土
12. 黄褐色粘土
13. 地　山

深さ 1.６４ｍあり，下部の方がやや大きくなる袋状を呈する。下層には植物質が平面にひろがっていた。これにも伴出遺物がなく，年代は判明しない。寺の年代まで古くなるものではないと推測される。遺物は谷状地形の埋土中から須恵器，土師器，弥生式土器片などが検出された。

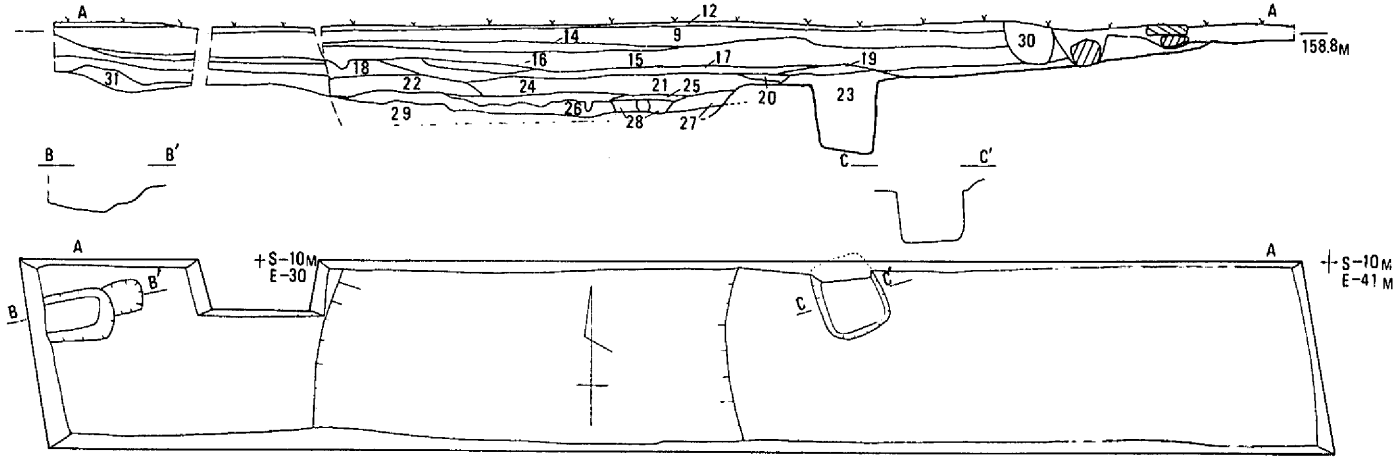
⑽　窯　址（第２３図，図版 7－１）

寺域の北側にある用水路の改修工事が行われていた。調査期間中にたまたま窯址が発見されて，工事にかかる周辺の調査を行った。位置は西８２ｍ，北２７ｍのところである。窯は平窯で燃焼室の部分にあたる。既に，中央部が幅 1.６ｍにわたって用水路になり，削平されていた。南側に６０cm幅で拡張した。燃焼室の平面形は現存幅 2.４ｍ，長さ 2.3 ｍで南側の中央部が少し張り出している。地山へ方形と十文字形に幅２０～３０cmの深さの溝を掘り，白色粘土を詰めている。床面は残存部



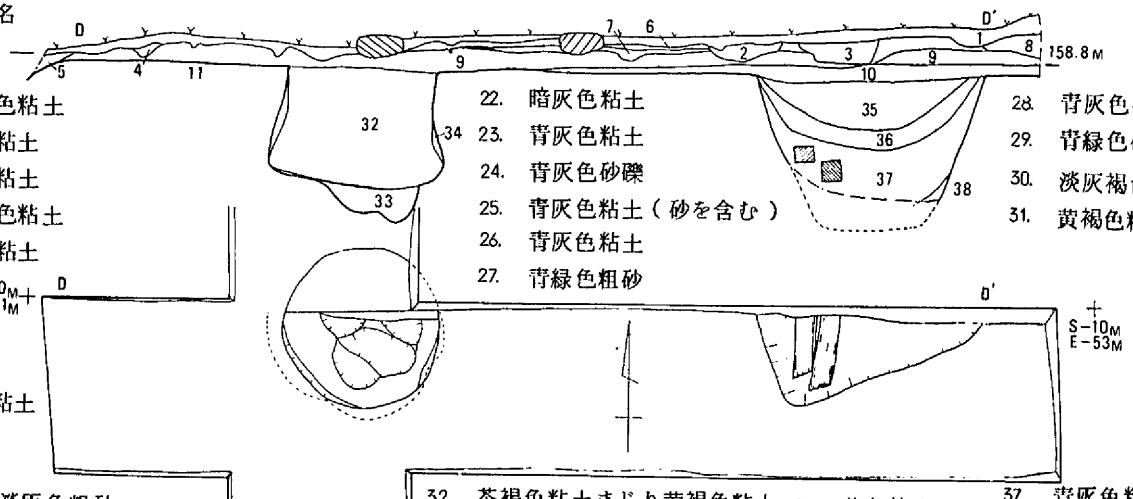
第２１図　　南１トレンチ実測図

1. 耕　土
2. 灰褐色微砂
3. 黄褐色微砂
4. 黄褐色粘土
5. 暗灰色粘土
6. 淡黄色粘土
7. 〃
8. 暗灰色粘土
9. 淡灰色粘土

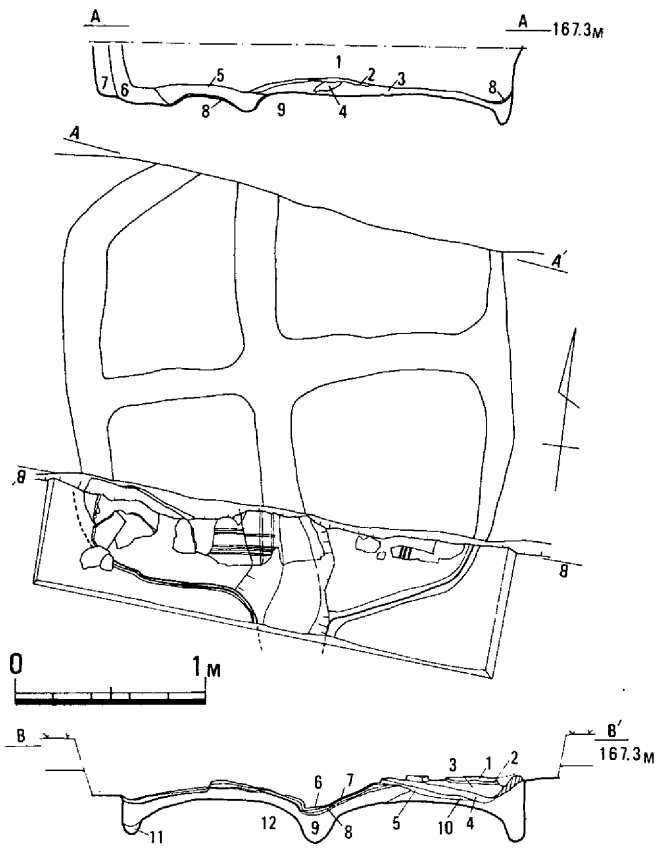


第２２図　南２トレンチ土層名

1. 表　土
2. 暗灰褐色粘土
3. 青灰色粘土
4. 暗灰褐色粘土
5. 青灰色粘土
6. 茶褐色粘土
7. 粗　砂
8. 青灰色粘土
9. 灰褐色粘土
10. 青灰色粘土
11. 黄褐色粘土（地山）
12. 茶褐色粘土
13. 焼　土
14. 暗茶褐色粘土
15. 暗褐色粘土
16. 黒褐色粘土
17. 暗灰褐色粘土
18. 暗褐色粘土
19. 灰褐色粘土
20. 淡灰色粗砂
21. 暗青灰色粘土
22. 暗灰色粘土
23. 青灰色粘土
24. 青灰色砂礫
25. 青灰色粘土（砂を含む）
26. 青灰色粘土
27. 青緑色粗砂
28. 青灰色砂礫
29. 青緑色砂礫
30. 淡灰褐色粘土
31. 黄褐色粘土
32. 茶褐色粘土まじり黄褐色粘土
33. 灰色粘土まじり黄色粘土
34. 黄色粘土
35. 暗茶褐色粘土
36. 青灰色粘土まじり黄色粘土
37. 青灰色粘土
38. 灰緑色粘土



第２２図　南２トレンチ実測図



A 断 面

1. 暗灰褐色粘土
2. 黒色土
3. 暗灰褐色土
4. 白色粘土
5. 灰白色粘土
6. 褐色土まじり灰色粘土
7. 茶褐色粘土
8. 焼 土
9. 地 山

B 断 面

1. 黒 色
2. 赤褐色
3. 灰褐色土
4. 黒 色
5. 赤褐色土
6. 青灰色
7. 黒 色
8. 赤褐色
9. 灰白色粘土
10. 灰褐色粘土
11. 暗灰色粘土
12. 地 山

第23図　瓦窯址実測図

分の断面でみると，3面がみとめられる。床面には南北と東西に細い溝状の線刻がある。中央部の床面は，40cm幅の溝が南北にのびる。南西隅には布目のある平瓦があり，他に掘りあげられた土の中にも布目瓦があって，瓦窯であることが判る。焼成室は北側にあると推定されるが，2m位の崖になり，上は水田になっていることから，調査していない。下部の断面をみると一段高くなっているものと推定される。南側の水田の下に灰原が推定されたが，これについても調査していない。出土した瓦に軒丸，軒平といったものがなくて，詳細な年代はわからないが，大海廃寺に関連するものである。

第２節　遺　物

出土遺物のほとんどは瓦類である。その数量は整理箱で60箱ある。遺物整理は一応終っているが，平瓦類については詳細な検討ができていない。瓦以外には，弥生時代中期以後の弥生式土器，土師器，須恵器，勝田焼，瓦器，備前焼，石器，水煙，鉄釘，銅銭，土錘，鉄滓などがある。

(1) 瓦

軒丸瓦は６種類出土し，作東町中央公民館に保管されている軒丸瓦１種類を加えると７種類がある。

１類（第２４図１）は素弁蓮華文，蓮子は１＋８，外縁は欠損していて不明である。厚さは４cmと厚い。この瓦は南門推定地域の大型土拡中から出土したものである。同種の瓦は，他に中房の破片のみが１点ある。

２類（第２４図２）は複弁７弁蓮華文，蓮子は１＋４＋(8)，外縁は線鋸歯文である。この瓦は中央公民館に保管されているもので，発掘調査では出土していない。

３類（第２４図３－１～第２５図３－４）は単弁１６弁，蓮子は１＋４＋１０，外区に楕円形の珠文をめぐらしている。厚さは３－１～３－３は３～3.5cmと厚いが，３－４は２cmの厚さしかない。胎土には細砂粒が多く，色調は青灰色を呈するものが多い。この瓦は小破片まで入れると１５点出土している。塔南トレンチで６点がまとまって出土し，塔に使用されていたものと推測される。

４類は複弁８弁蓮華文，蓮子は１＋６，珠文，外縁は幅の広い線鋸歯文である。厚さは比較的薄く，1.5～２cm位の厚さである。胎土には細砂を多く含んでいる。色調は灰白色を呈するものと二次的に火をうけたためか黄褐色を呈するものがある。この瓦は小破片まで入れると１８点出土している。金堂の北トレンチで４－１が出土したが，塔北トレンチでも出土している。

５類は直径が小さく，築地瓦と考えられる。小破片で３分の１位が円形に切ってあり，隅に使用されたものであろう。胎土には細砂を含み，黄褐色を呈する。この瓦はこれ１点のみである。

６類は磨滅が著しくて詳細がわからないが，蓮子は１＋８，珠文がめぐっている。胎土には砂粒を含み，色調は灰色を呈する。この瓦はこれ１点のみである。

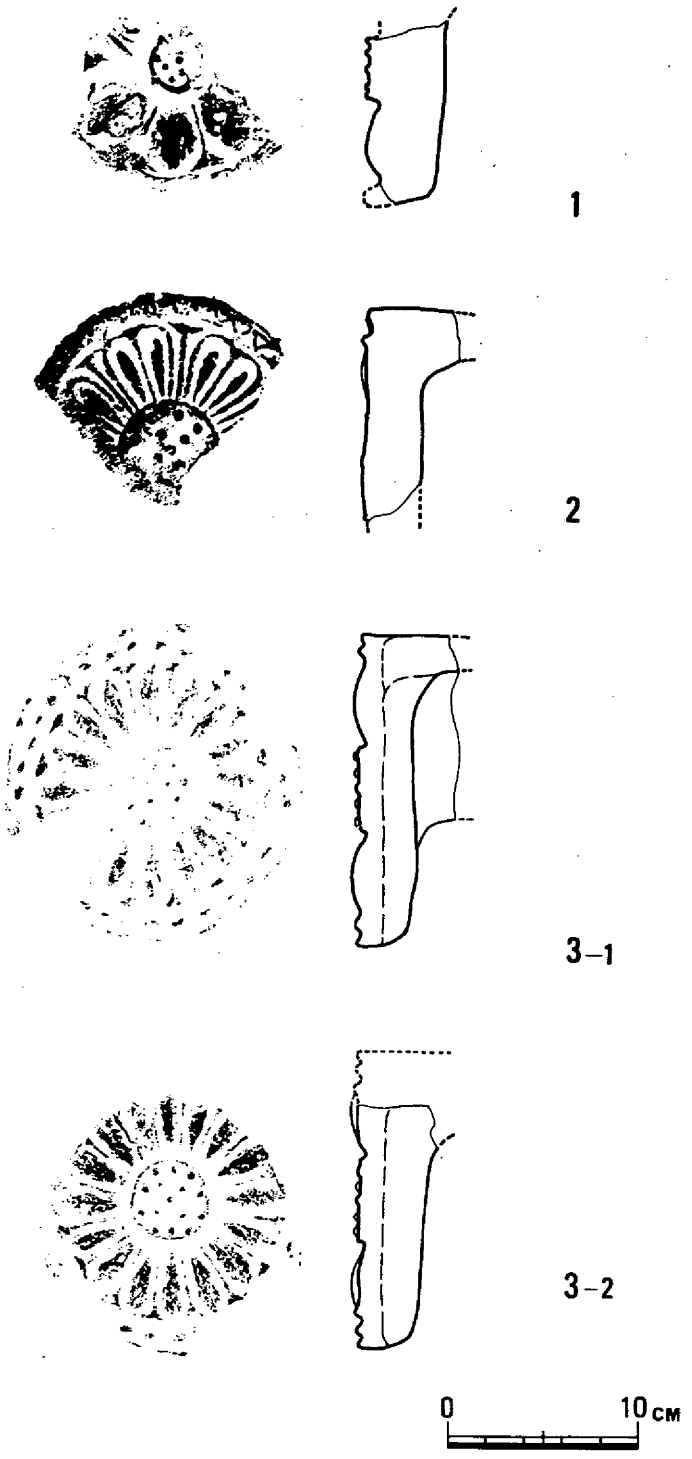
７類は中房の部分だけの破片である。蓮子は１＋８である。胎土には細砂粒を多く含み，青灰色を呈する。この瓦もこの破片のみである。

軒平瓦は３種類出土している。

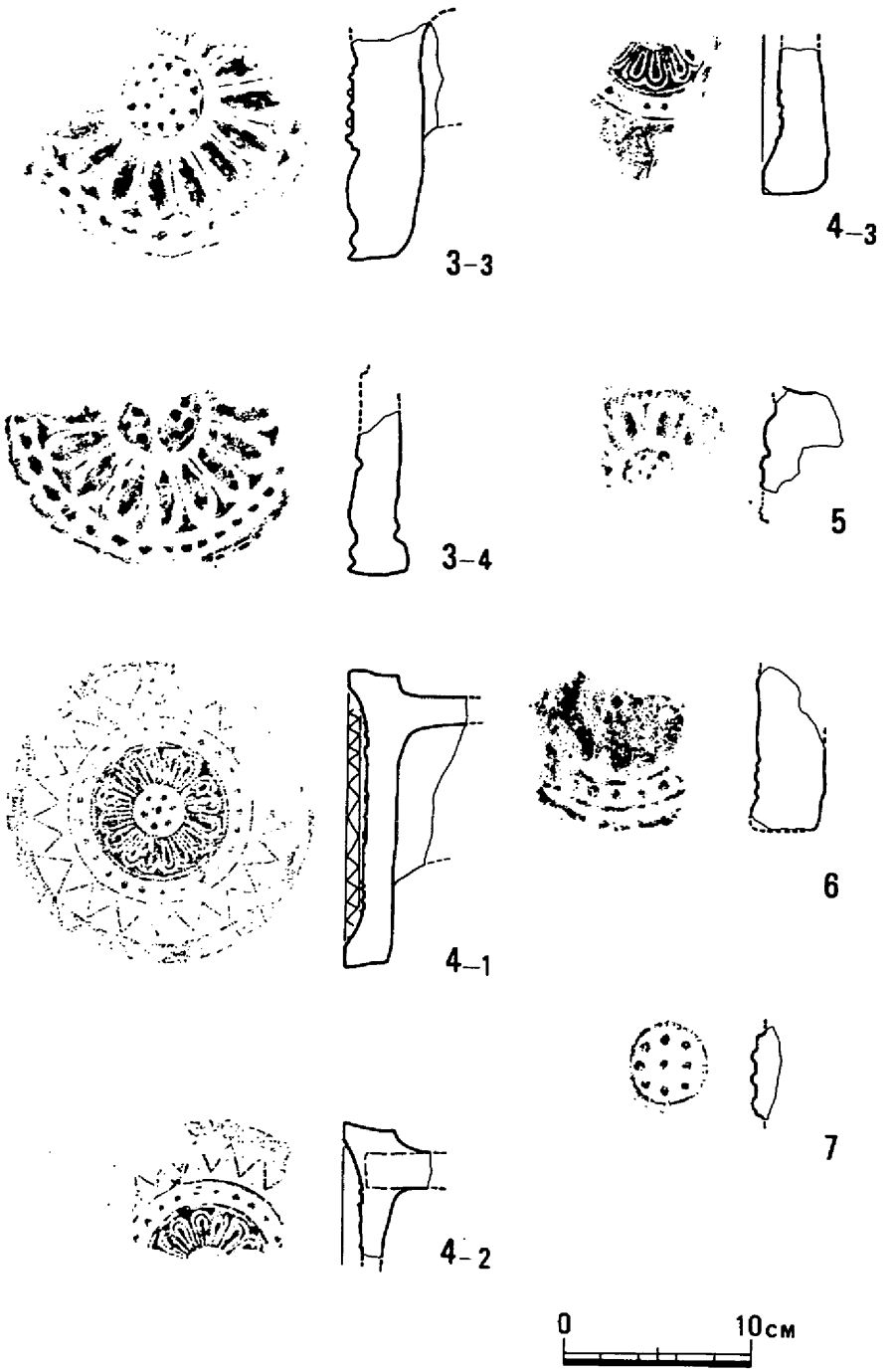
１類（第２６図１－１～１－４）は３～４本のヘラ描きによる重弧文で，端部は肥厚せず，裏面には断面半円形の凸帯に赤色塗料が付着している。色調は青灰色を呈し，焼成は堅緻である。

２類（第２７図２－１，２－２）は１類と類似しているが，文様が施されず，１類より厚い瓦である。胎土には砂粒を多く含み，色調は灰白色を呈する。

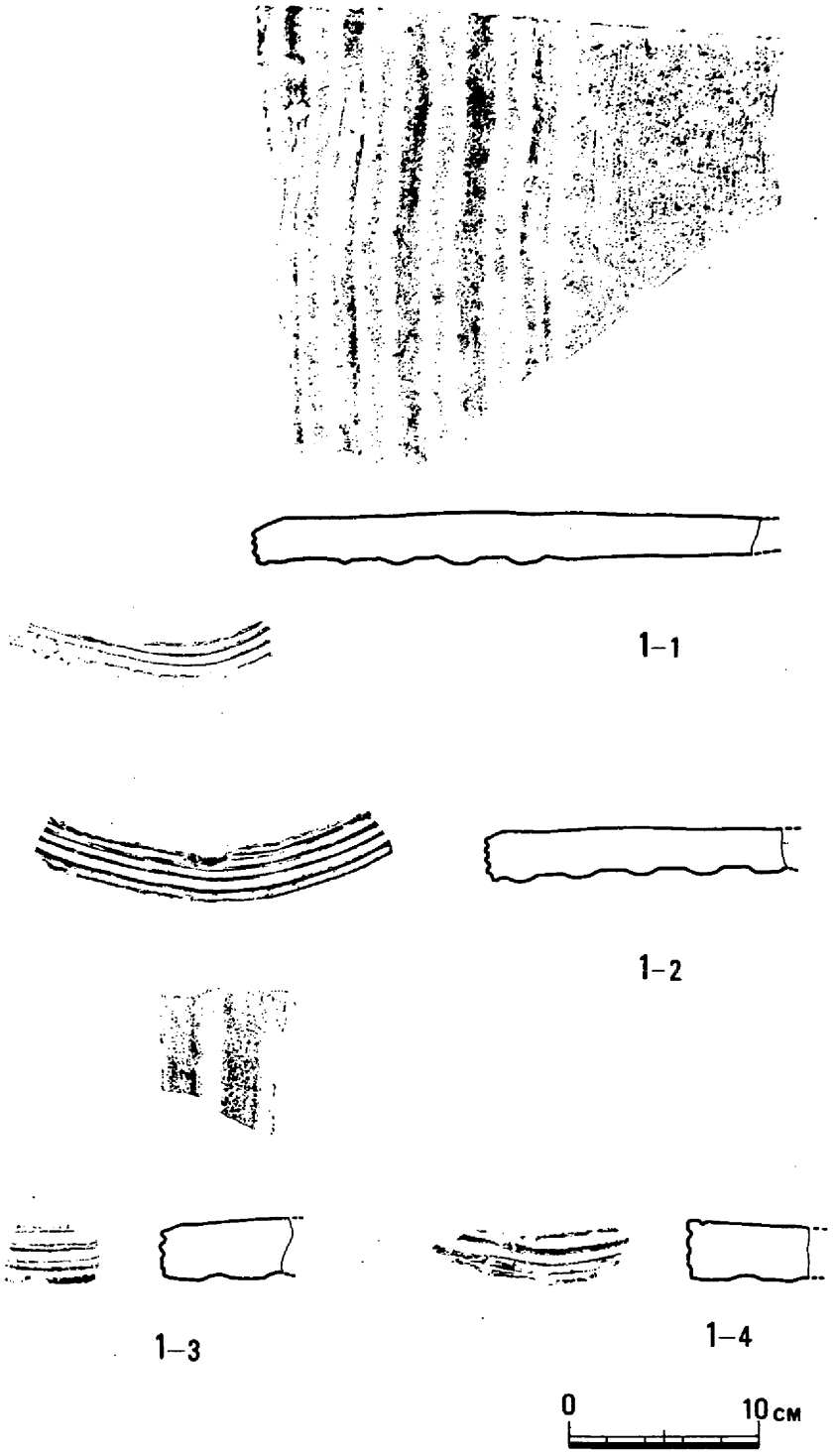
３類（第２７図３－１～３－３）は均整唐草文で外区には珠文をめぐらしている。３－１は二次的に火を受けたためか，黄褐色を呈する。３－２は青灰色を呈する。３－３は少し薄手で，文様も



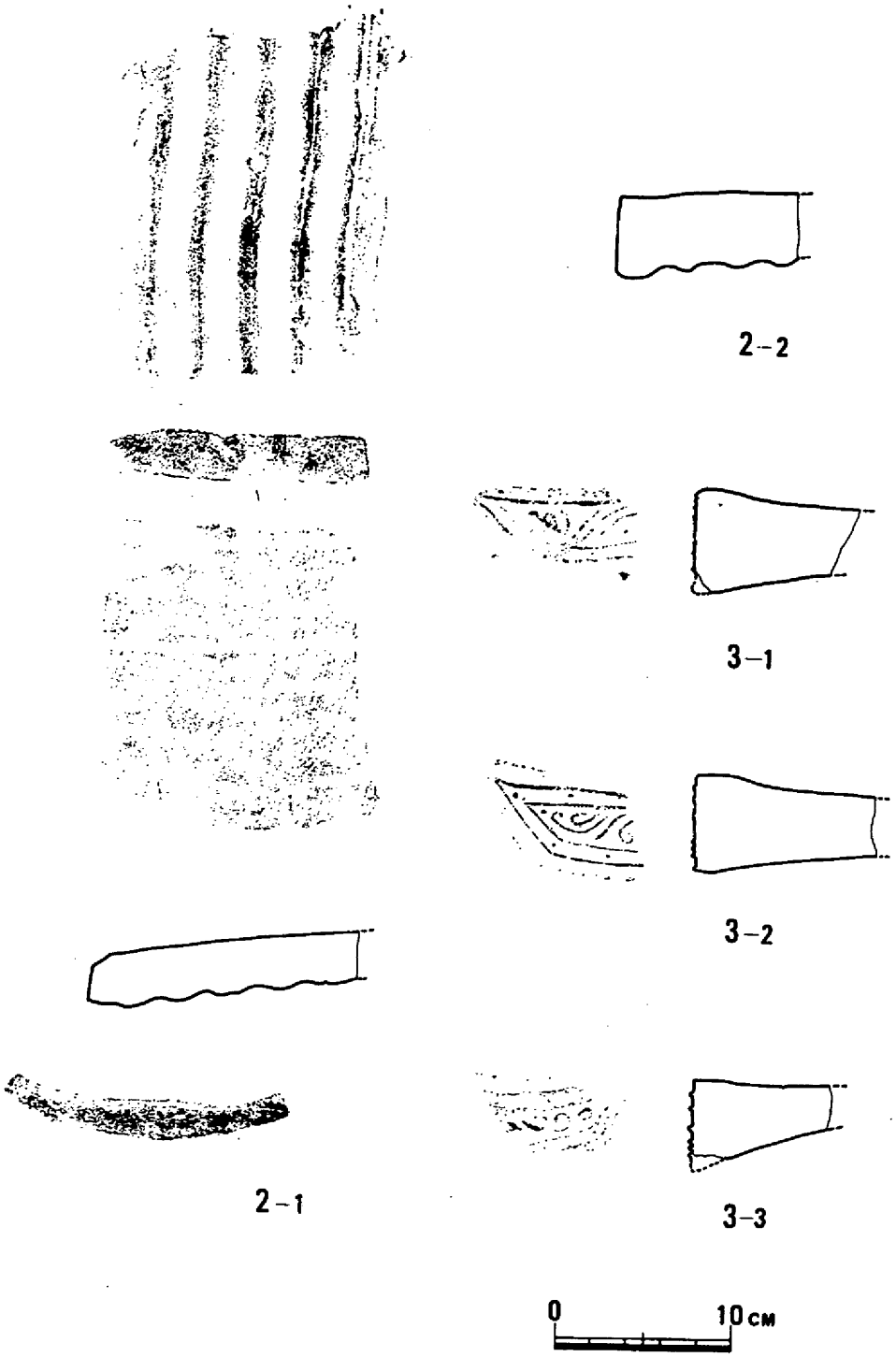
第24図　軒丸瓦実測図(1)



第25図　軒丸瓦実測図(2)



第２６図　軒平瓦実測図(1)



第27図　軒平瓦実測図(2)

粗雑である。

平瓦には斜格子の叩きと縄目の叩きがある。斜格子の叩きには比較的深いものと浅いものがある。斜格子の叩きはかなり磨り消している。布目は目の粗いもののほか，きわめて細かい目のものがある。平瓦の厚さは不揃いである。第２７図３は作東町中央公民館に保管されているものである。丸瓦には行基瓦と玉縁のつくものがある。

鴟尾の破片は多数出土している（第２９図）。１は作東町中央公民館に保管されているもので，鰭部の段はほとんど湾曲せず，幅が広い。焼成は堅緻で，色調は淡青灰色を呈する。２は金堂基壇で検出されたもので，二次的に火を受けたためか灰色を呈する。３～６は南門推定地域の大型土坑中から検出されたものである。４が淡青灰色を呈する他は黄褐色である。鰭部の段は２，４，６では湾曲している。３は腹部と接合した破片である。

瓦の年代では，軒丸瓦の１類～３類が白鳳時代に属し，４類は奈良時代後期に属する。１類は英田郡周辺に類例が知られていないが，２類は昭和５０年度に県教育委員会が調査した美作町楢原廃寺に類例がある。他には作東町江見廃寺，同町竹田廃寺，同町土居廃寺に類例がある。３類は英田郡周辺に類例がわかっていない。４類についても不明。７類は中房だけしかないが，勝田町勝間田遺跡に類似するものがある。

軒平瓦では１類，２類が白鳳時代で，３類が奈良時代後期に属する。１類は楢原廃寺出土のものに若干類似しているが，大海廃寺のものは粗雑なつくりである。

(2) 水　煙（第３０図１）

塔基壇上面の清掃中に水煙の破片が１点出土した。L字形に曲がる一辺にさらにのびる部分がある。長さ８.１cmの小さな破片で，全体を推定するのは難しい。断面は台形を呈し，厚さ１.８cmを測る。全体に鉄錆がふいている。

(3) 鉄　釘　他（第３０図）

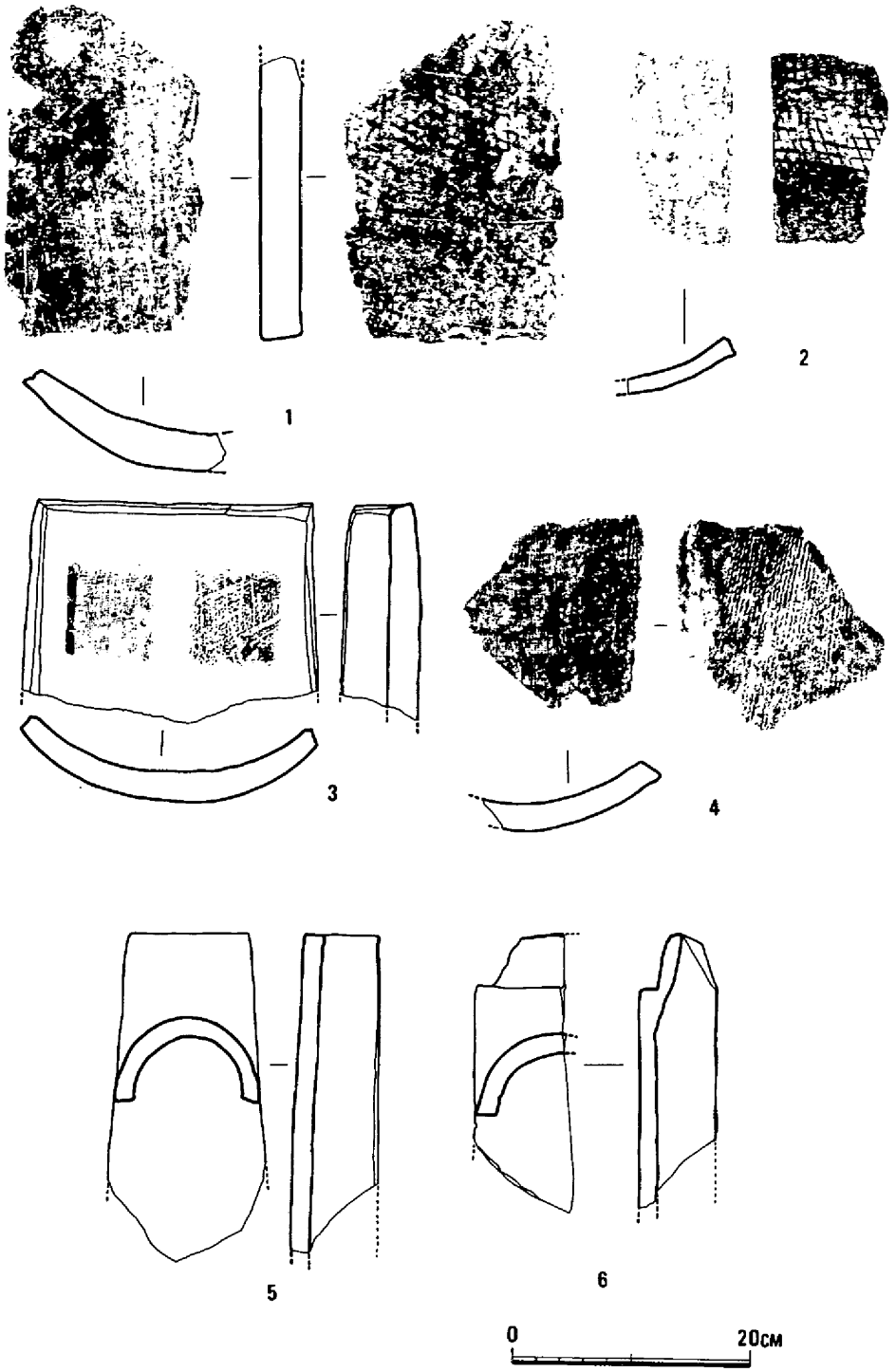
鉄釘は小破片まで含めるとかかり多く出土している。金堂北トレンチ，塔北トレンチでは比較的多い。角釘で頭を若干折り曲げるものとまったく何もしないものとがある。大きさもまちまちで，大きなものでは，１が長さ２１.４cm，断面は９×１１mm，２は現存長１３.６cm，断面１０×１５mmを測る。小さな釘の方が多い。１８は薄い鉄板であるが用途不明。１９，２０は金堂基壇の下層にある古墳時代の包含層中から出土した鉄鏃である。

(4) 須恵器（第３１・３２図）

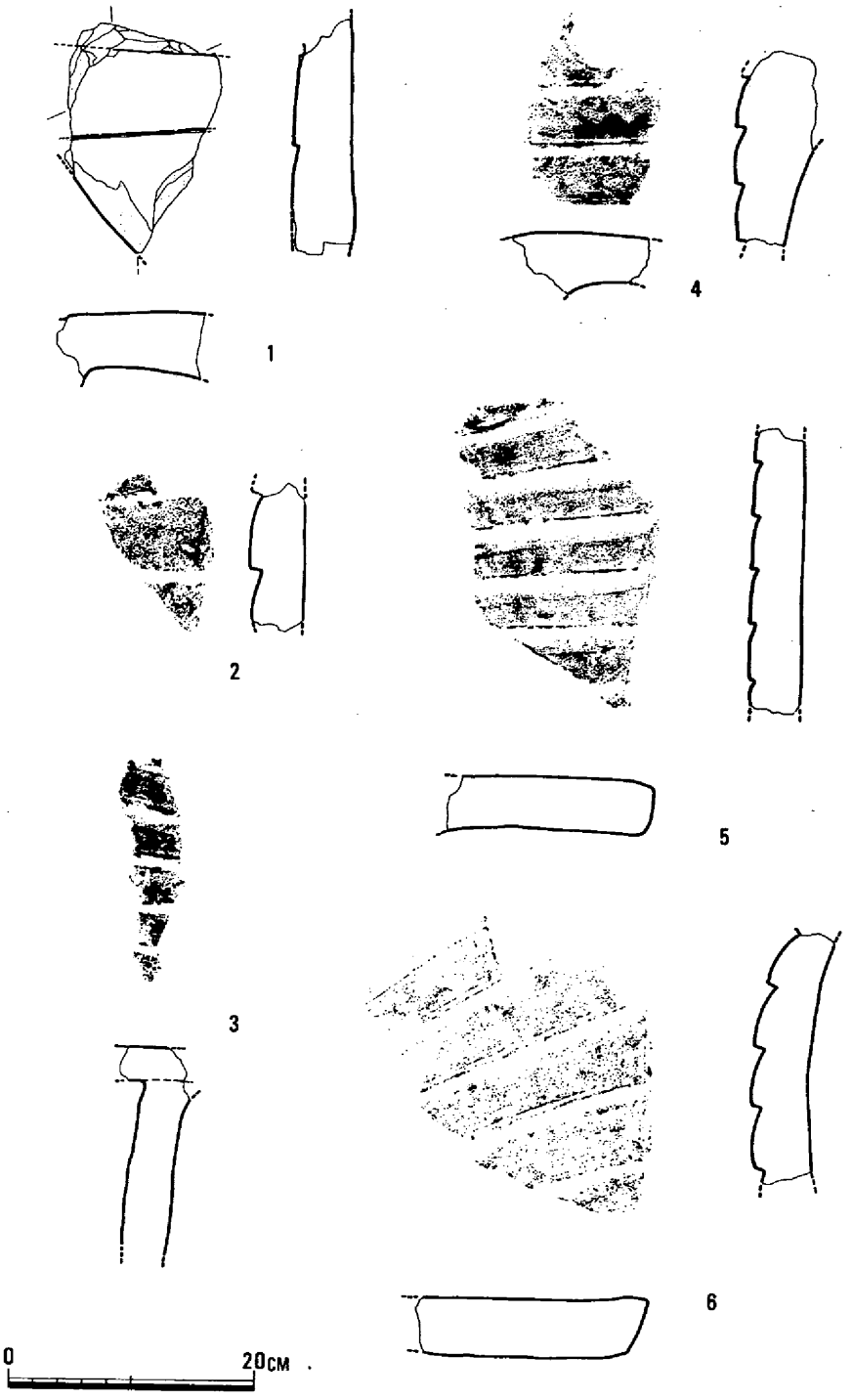
今回の調査によって出土した須恵器はかなりの量にのぼるが，遺構に伴って出土したものはごくわずかであり，大部分は包含層出土のものであった。杯を中心にして概述を行う。

杯（椀）・皿（１～２８）７類に分けることができる。

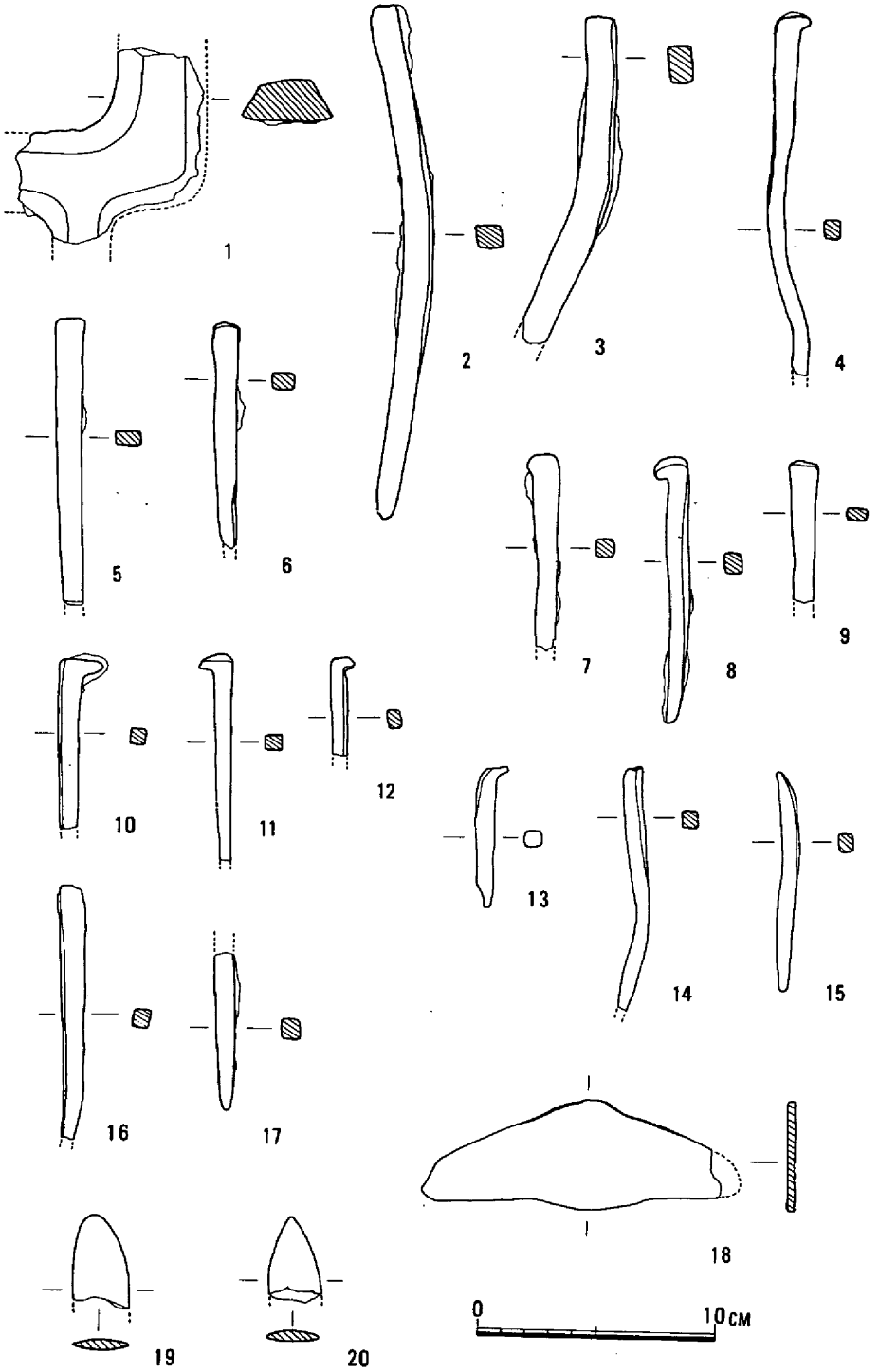
第１類（１～４）は立ち上りをもつものである。１は金堂北トレンチ内柱穴列の北柱穴の埋土から出土したものであり，口径９６mmを測る。他は４破片であり口径は不明である。１を除いて，胎



第２８図　平瓦・丸瓦実測図



第２９図　　鴟 尾 実 測 図



第３０図　　鉄 器 実 測 図

土には細砂をかなり含んでいる。焼成は良好である。

第２類（５～８）はふん張った高台をもつものである。体部と底部の境は鈍い稜をもつぐらいで，かなり丸味をもっている。７・８の高台端はやや外側に拡張している。

第３類（９～１１）は短く垂下する高台をもつ。体部と底部の境は明瞭で稜をもつ。高台端は内，あるいは外側に拡張する。

第４類（１２～１４）は斜めに長くのびる高台をもつ。高台端は若干はね上げ状になる。体部と底部の境は不明瞭であり，口径に比し，高台の径は著しく縮小する。体部にはロクロナデによる細かい凹凸がみられる。１５は皿であるが，高台の形態はこの類に属する。

第５類（２１・２２）は糸切り底である。底部には高台風の突出部が残っている。

第６類（２３～２５）も糸切り底であるが，５類のような底部の突起が消滅する。

第７類（２６）は，糸切り底に断面三角形の高台を貼り付けている。

杯（椀）の口縁部には種々の形態のものがみられる。１６は稜椀である。口縁部が屈折して外反し口縁端は更に強く外反する。屈折部分の外面の稜はきわめて鋭い。１２と２０の間にみられる口縁の相違は，時期的なものである可能性がある。１２の底部は第４類と推定されるが，１９・２０に対応する底部は不明である。

蓋（２９～３５）　つまみには中央部の凹むもの（２９）と低平な宝珠形（３０・３１）の二種がある。口縁端の形態は単純に屈折するもの（３２・３３）と一度外反したのち屈折するもの(34)下へ拡張するもの（35）がある

壺（４５～５１）いずれも明瞭な口縁端面をもち，内側へ拡張する。４５は口縁端面に軽い凹線をもつ。胴部内面には青海波文がみられる。４６の高台は杯第３類と同様のものである。５０は高台をもち，体部境に突帯をめぐらせるものである。５１はその形態から壺類の底部と考えられるが，やや特異な形態である。焼成は不良で，白色を呈する。

盤（３６）　傾斜する口縁端面をもつ。内側の稜は鋭い。体部と底部の境は鈍い稜をもつ。胎土には砂粒・細砂をかなり含み，灰黒色を呈する。

甕（３８）　口縁部破片である。口縁端断面は方形をなす。口縁端は，わずかに上方へ内湾する。

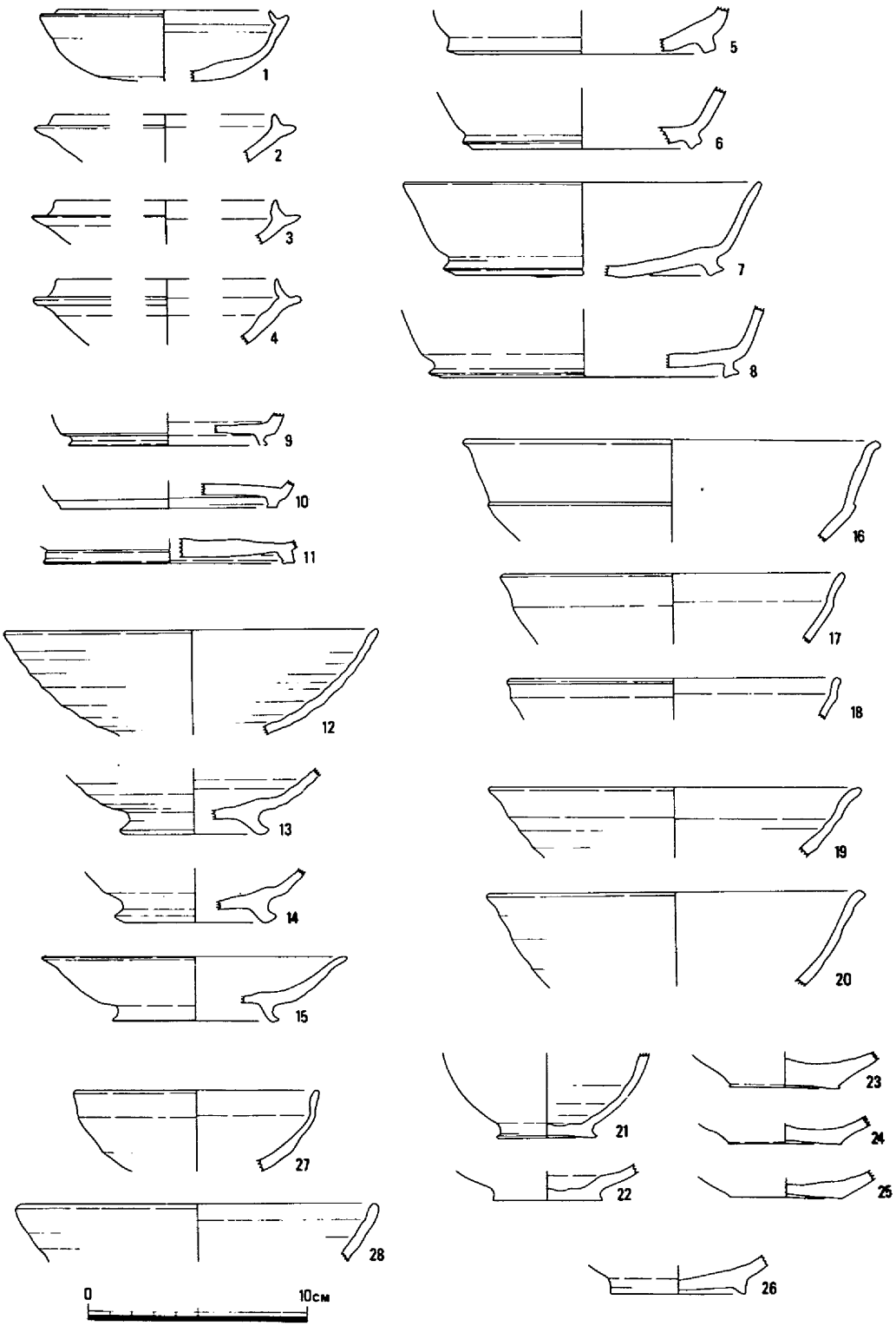
高杯（３９～４４）　脚部の形態は柱状部をもつもの（３９・４１）と徐々にひろがるもの(40)がある。脚端部は屈折によって，下方へ拡張させる。

円面硯（５３）　陸部のみの破片が，講堂北トレンチより出土した。陸部から海部への傾斜部分に稜線をもつ。透し孔の先端が残存している。角張らずに丸い。陸部は磨滅によって鈍い光沢をもっている。

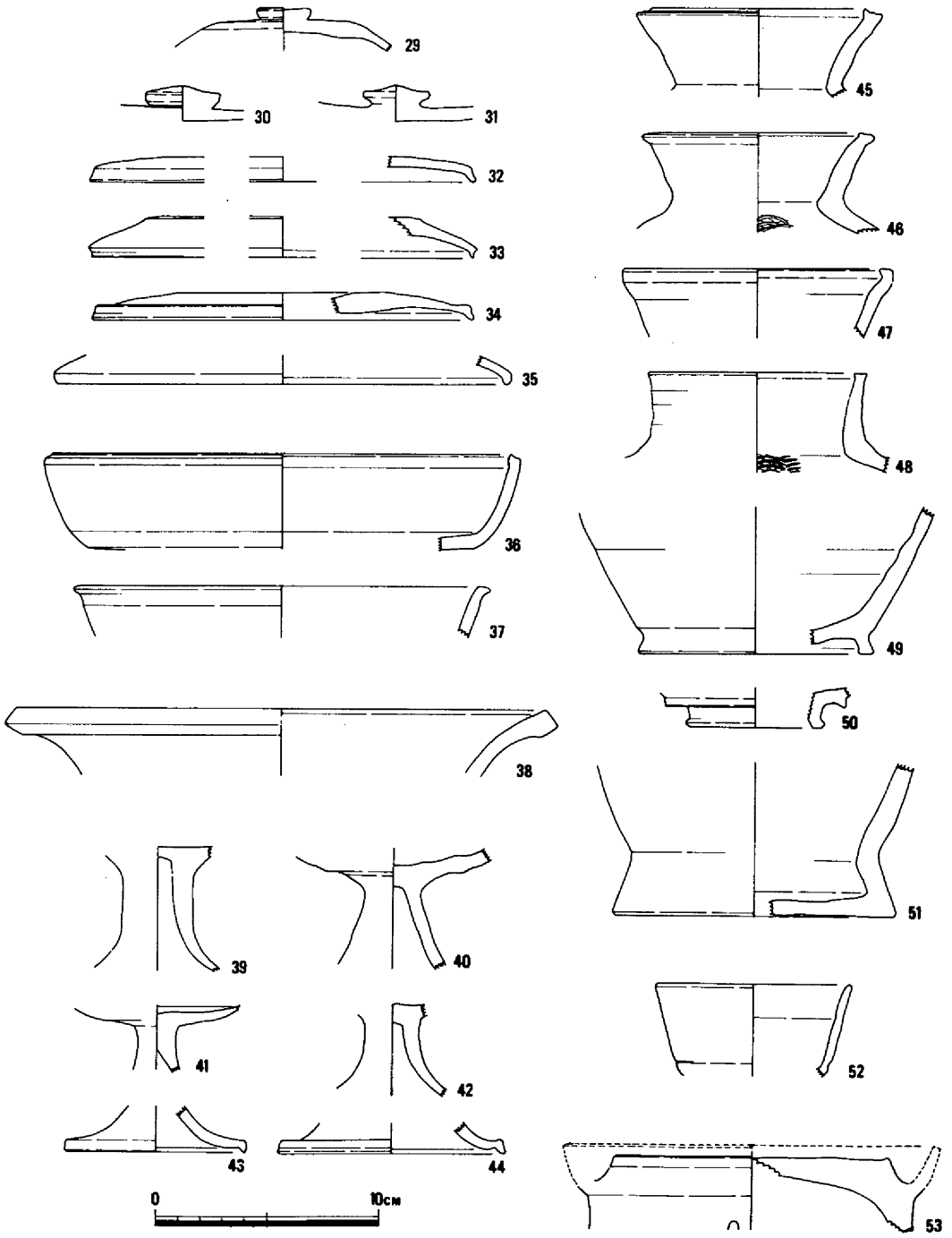
(5)　弥生式土器・土師器（第３３，３４図）

寺域のトレンチ調査中，量は少ないが，弥生式土器，土師器が出土している。下層にある竪穴式住居址，柱穴等に関連するものであろう。

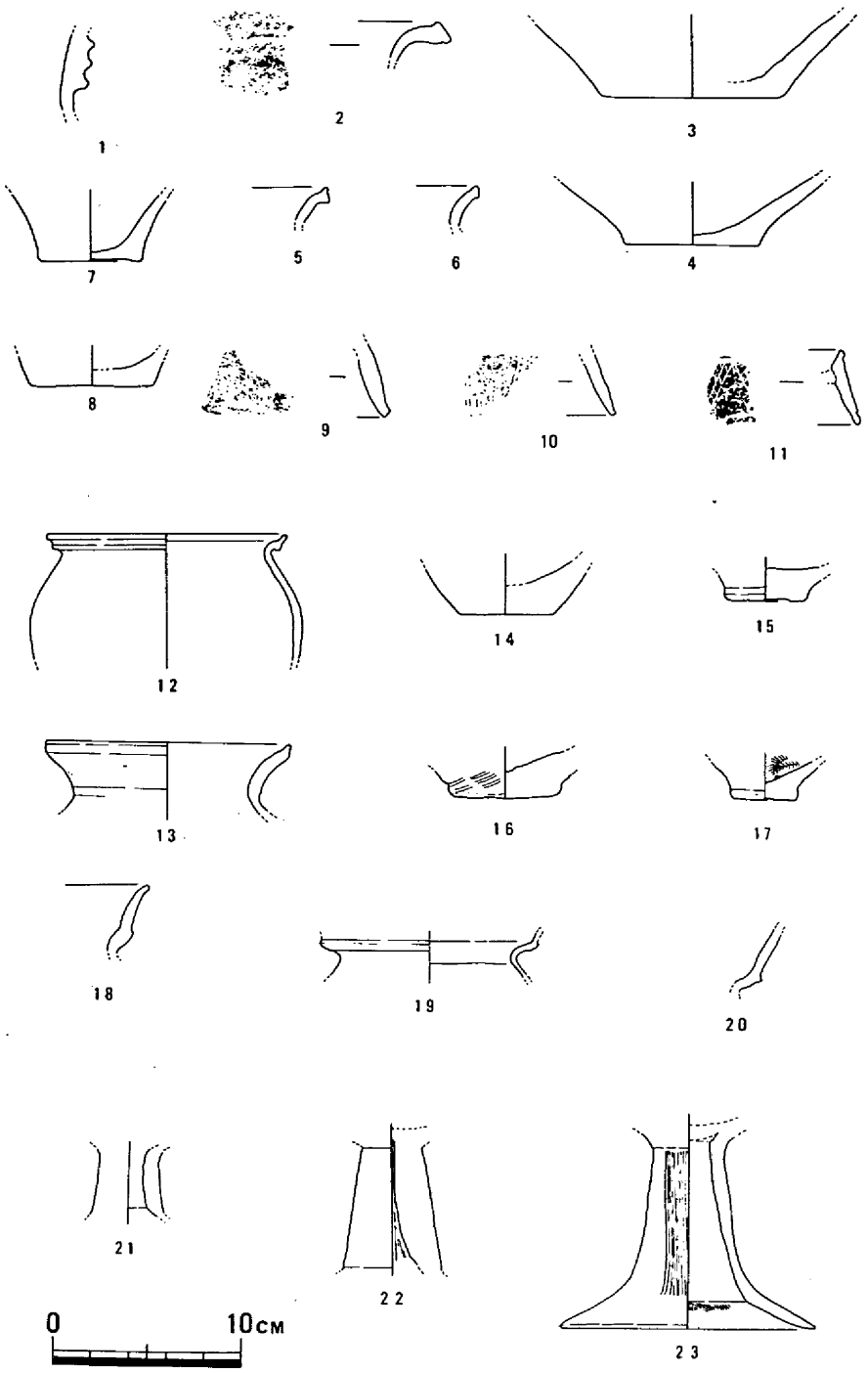
１は弥生中期中葉の壺の破片である。２も磨滅が著しいが，弥生中期の壺の口縁部であろう。３，４も弥生中期の壺の底部である。３，５～１１は弥生後期に属するものであろう。９～１１は飾ら



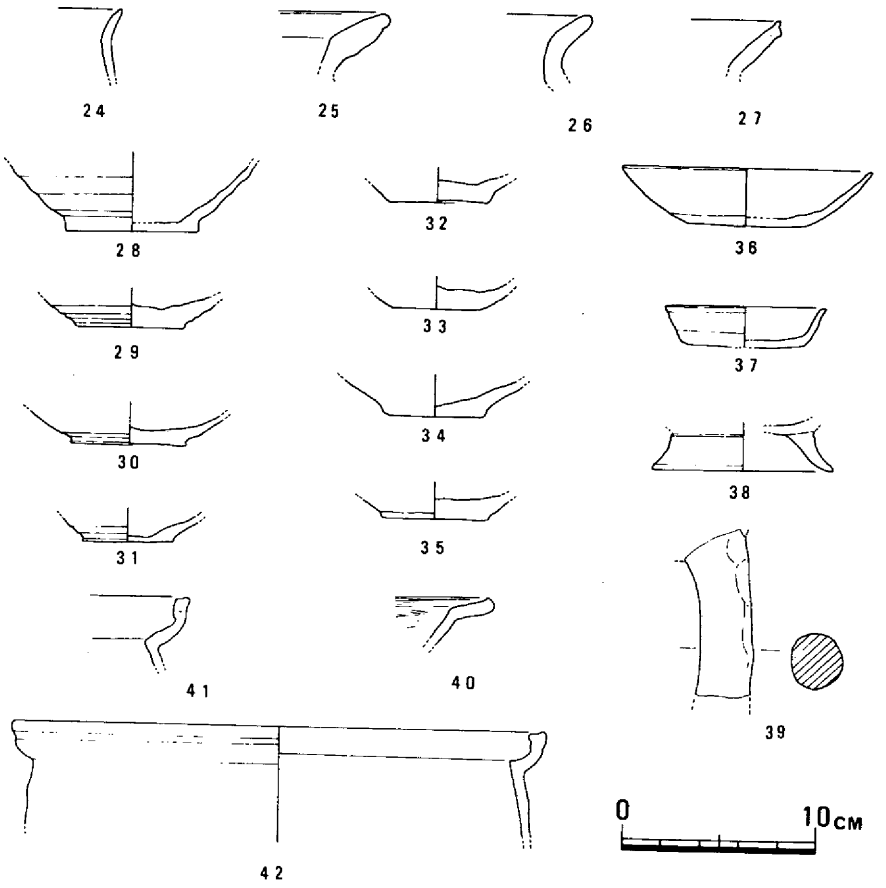
第３１図　　須恵器実測図 (1)



第３２図　　須 恵 器 実 測 図 (2)



第３３図　　弥生式土器・土師器実測図



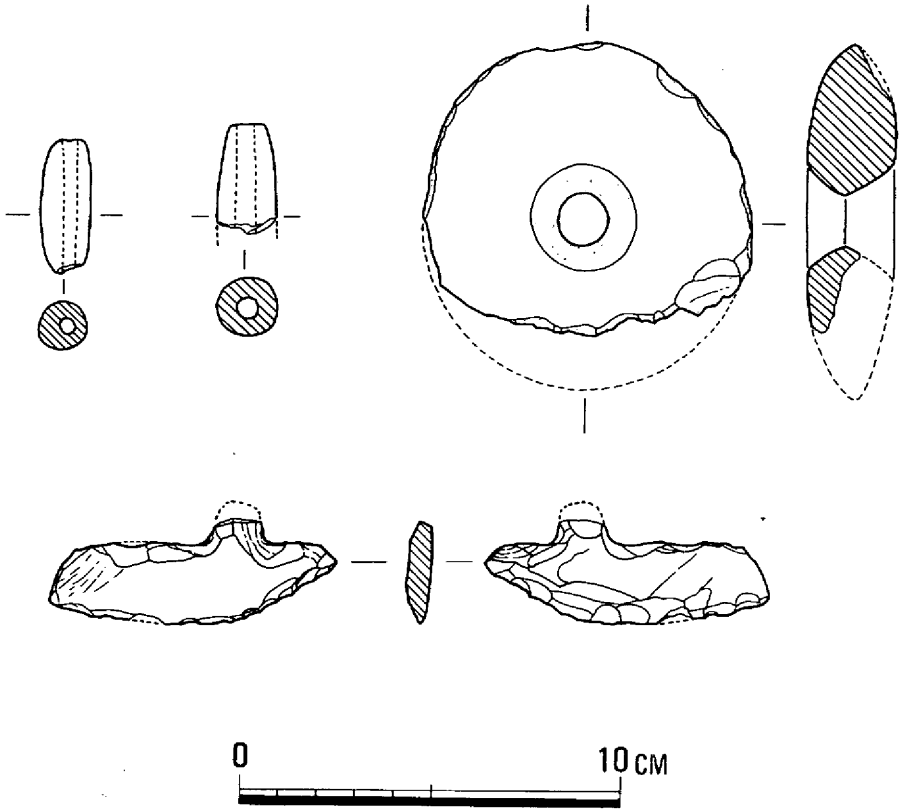
第３４図　　土師器・瓦器実測図

れた高杯の口縁部で，外面に鋸歯文を配している。いずれも細砂を含み，灰色～黄褐色を呈する。１２は南２Ｔの西端で検出された土坑埋土中から出土したものである。口縁部にくせをもち，くびれて外反する。肩部が少し張っている。胎土には細砂を含み，色調は，外面が灰色，内面が黄褐色を呈する。いわゆる酒津式に属する。１３～１７も酒津式かその直後に編年されるものである。１６の外面には平行タタキめがみられる。１８～２２は古式土師器と呼ばれる時期のものである。２３はその後に位置づけられるものである。

２４～２７は甕の口縁部で，古墳時代から奈良時代にかけてのものであろう。３７，３８は奈良時代に遡るもので，２８～３６は平安時代に降る。３７は内面に煤が付着していて灯明皿として利用されたものである。３９は脚付甕の脚部破片である。４１，４２は瓦器とした方がよいと考えられる土鍋の口縁部破片で，鎌倉時代以降のものである。

(6)　石　　器（第３５図１，２，図版１０－３）

塔基壇の上面を清掃中に環状石斧１点が検出された。一部を欠失しているが，中央の穴は完全に



第３５図　石器・土錘実測図

残っている。直径は８.７cm，厚さ２.３cm，中央の穴の直径１.３cmを測る。講堂北トレンチではサヌカイト製の石匙１点が検出された。横長の形で，長さ７.５cm，高さ２.７cm，厚さ６mmを測る。サヌカイトの破片は他にもある。２点の石器は弥生時代中期に属するものでと推定される。

(7)　その他の遺物

以上の他に，土錘，銅銭，鉄滓，勝田焼，備前焼等が出土している。

土錘（第３５図３，４）は２点ある。形は紡錘形を呈し，胎土には細砂を含み，色調は灰白色～淡黄褐色を呈する。重量は完形のものが５.５gである。

数種類の銅銭が出土している。金堂基壇の上に祀られた荒神社周辺には若干の寛永通寶があり，他には，熙寧元寶（１０６８年），大観通寶（１１０７年），宣和通寶（１１１９年）が各１枚出土している。

格子目の叩きを施した勝田焼の破片もある。備前焼の壺，擂鉢などもある。青磁・白磁の破片は少量である。

トレンチ調査では塔北トレンチと南５トレンチにおいて，それぞれ１カ所の鍛冶炉が検出された。これに関連するものと考えられる鉄滓が広く散布していた。金堂北トレンチ中の建物の柱穴中からは大きな塊が出土した。

ま　と　め

美作地方の古代寺院址の調査は，近年，相次いで行われ，次第にその実態が明らかになりつつある。

大海廃寺は吉野川右岸山裾の緩斜面に立地している。小さな谷ではさまれた南北へ舌状にのびる高まりの上に立地している。南北は長いが，その幅は１００ｍに達しない。トレンチ調査では，東と西を限る施設は確認されず，自然の谷地形のみが明らかとなった。塔と金堂が接近して建てられ，北側の民家の下から直径４５cmを測る桧材の柱痕を検出していることから，講堂と推定される。その北側には方形の掘り方をもつ柱穴が検出されていて僧房の可能性がある。中門推定地域では民家の下になっていて不明だが，南門推定地域ではわずかに残った柱穴が検出された。北限は現在の東西道路が１ｍ以上の段差があり，南門推定地から約１００ｍである。

塔は心礎が原位置で残存し，四天柱の礎石２個がやや移動して残っている。周辺が削平されているが，北側のトレンチで基壇の一部を検出した。基壇化装はわからないが，心礎の中心から5.4ｍを測り，一辺１0.８ｍの方形基壇であったことが判る。畔などに４個の礎石がある。

金堂は竹やぶになっているが，北側と西側の礎石列を検出し，その残存状況から，南北方向で５間×４間の建物が想定された。柱間は桁行が２００cm，梁間が１９５cmを測る。北と西に雨落溝が残存し，乱石積基壇の一部も確認された。礎石列から南北の方向はN 8.5°Wとなる。トレンチ内で測定した塔の基壇端部で測定した塔の南北方向はN 9.5°Wを測り，ほぼ類似することから，寺の南北方向の軸線はN 8.5°Wと想定される。

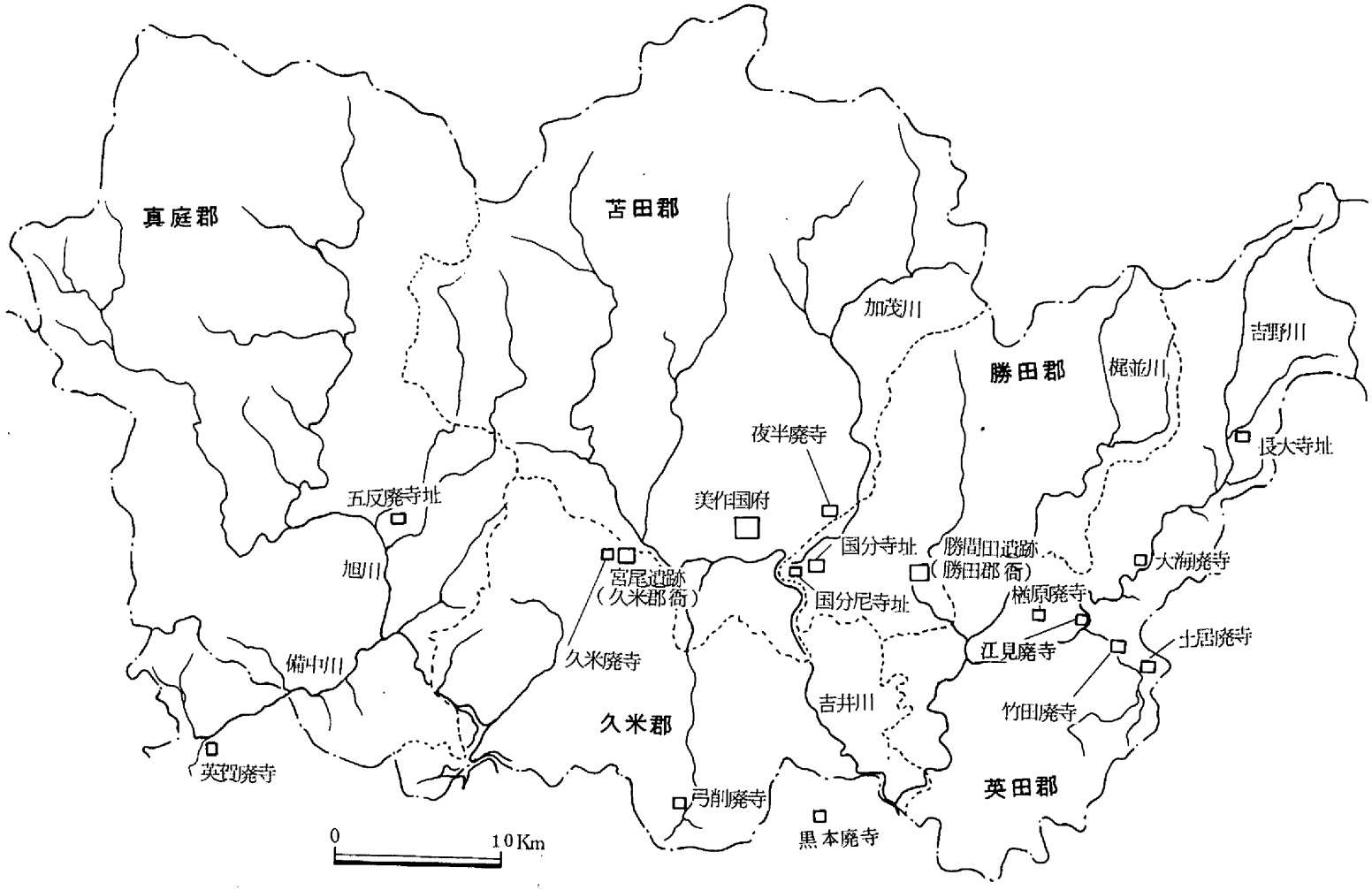
塔と金堂の位置関係は金堂が南へ下がっていて，塔と正確には並ばない。金堂の北の中心線とは２5.２５ｍを測り，かなり接近して建っているのは狭い地形に制約されたものであろう。

講堂は掘立柱建物であった可能性もある。南門推定地域には大きな土坑が掘られていて，寺関係の遺構に影響を及ぼしている可能性がある。南北に並んで検出された柱穴は金堂の方向と一致し，位置からみて，南門になる可能性が考えられる。その他に，礎石建物に先行する掘立柱建物の存在が明らかになったが，寺であったかについては判明しない。

瓦からすると白鳳時代のものがあり，奈良時代後半のものまである。北西部に瓦窯址があり，差しかえ瓦を焼いたものであろう。雨落溝中には瓦溜りがあり，瓦が二次的に火を受けていることから，平安時代初めには焼失し，再建されていない。

水煙や鉄釘などは検出されたが，仏像片などは発見されなかった。

吉野川の流域はきわめて狭小な平坦地しか存しないにもかかわらず，多数の古代寺院が存在することは重要な事実である。経済基盤が農業生産にのみよるとは考え難く，何か別の生産も想定するべきであり，あるいは美作の鉄生産にかかわって，鉄生産が古代まで遡り，古代の英田郡に多数の寺院址を建立する経済力をもたせたと考えることもできる。瓦やその他の遺物について，他地域と比較するに至っていないが，今後の課題としたい。



第３６図　　美作地方奈良時代寺院址分布図

1. 大海廃寺遠景（南から）

2. 大海廃寺遠景（西から）

図版 2

1. 塔　基　壇（南から）

2. 塔　心　礎（西から）

1. 金 堂 基 壇（北東から）

2. 金 堂 基 壇（北西から）

図版 4

1. 金堂北トレンチ瓦溜り（東から）

2. 金堂北トレンチ雨落溝（東から）

1. 南 7 トレンチ（東から）

2. 南 5 トレンチ（西から）

図版 6

1. 講堂推定地域柱痕（東から）

2. 金堂北トレンチ建物址（東から）

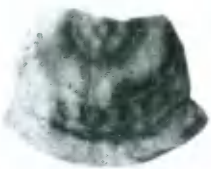
1. 瓦　窯　址（西から）

2. 南 4 トレンチ，土壙（西から）

1

3

2



4

5

7

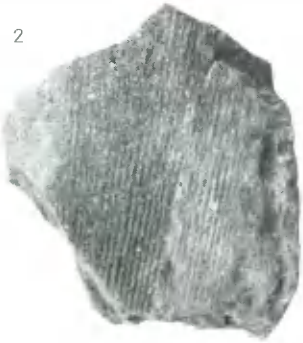
6

軒丸瓦・軒平丸

1

3

2



4

鳴尾・平瓦

1

3

2

4

鴟尾・平瓦

図版10

1. 水煙，鉄釘，鉄鏃

2. 円　面　硯

3. 石　　器

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（26）

大海廃寺緊急発掘調査概報

1978年3月31日発行

発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2－4－6